中等教育

第壹號

中華民國十五年五月十七日發行
（每月一回十日發行）

13-489

修身

發行の主旨

本誌は、今日、中等教育を資けるために發行されてある書類が、無趣味雜駁で、眞に學生の爲めになるのが少ないのを見、此の缺陷を補はうとして現はれたものである。其の中心とするところは中學の教科たる諸學術の講話で、其の他に雜錄、譚叢、紹介、彙報、懸賞作文等の欄を置いた。講話欄には、修身、歷史、國語漢文、理科、地理、英語、及び法制經濟等の諸科目があるいづれも、方今第一流の專門大家が擔當され平易で

卷頭口繪

國陛下の御製（石版刷）　大正二年
官公の肖像（木版十度刷）
加藤、江原兩校長の肖像（寫眞石版）　杉谷代水作畫、田村虎藏作畫
高田、坪内、天野三博士の肖像（同上）　中學日記（木版）　一條成美畫

講話

開講に臨みて讀者に告ぐ（修身）　文學博士　坪内雄藏
十九世紀の英國、上（歷史）　講師　澁田和民
地理と人種、上代の支那（同上）　文學士　高桑駒吉
かへるの話（博物）　理學博士　石川千代松
植物學研究法（同上）　理學博士　松村任三
物理學の定義、外六項（理科）　理學士　本多光太郎
皮膚の衛生生理及び朝起の事（生理衛生）講師　糸左近
地理學の必要　外一項（地理）　農學士　志賀重昂
分數の話（純粹）　法學博士　天野爲之
英語研究の心得（英語）　講師　村井一知

雜錄

專門の撰み方　法學博士　高田早苗
大島　農學士　志賀重昂
大島及び其の風俗（寫眞石版）
日用語彙（日英同盟、總選擧外三項）
人と戰話（三上文學博士の德川家康談外四項）
官公と官公千年祭
エーゴーと其の百年祭（肖像入）
セシール、ローズとは何人ぞ（同上）　伊藤秋南
實業用語案内
懸賞作文募集、彙報、海外叢談、其の他

譚叢

西洋武士の魂　松村介石

趣味のある文章を以て叙述される。而して、其の講話は、毎號讀み切りとして一段落を告ぐるようにし、十五ヶ月で完結させる仕組である。又、雜錄、譚叢以下の諸欄に於ては、或は知名の教育家、文學家の文章、諸學術に關する專門大家の談話を揭げ或は內外の史傳に關する興味ある談話、專門學術の平易なる說明、古來東西の偉人の發明苦心の事實などを載せ、或は各中學の學風、中學生の參考となるべき內外の事件を報導するなど、すべて中學程度の學生に趣味と

實益とを併せ得させるを主眼としてある。試みに、本紙の特色といふべきを擧ぐれば、

一、專門大家の確實多趣味なる講話により、穩當確實なる倫理知識を與へて、品性を高め、高雅なる嗜好を養ふこと、

二、確實なる科學知識を與ふること、

三、各科の講話すべて毎號讀み切りとし、十五ヶ月にして各科全體を講じ終ふること。

などで、本誌の主旨は、之によつて、中等教育に貢獻し、

學術の普及國民教育の發達を謀らうといふのである。

明治三十五年五月

『中等教育』編者しるす

修身講話

文學博士　坪内雄藏講述

中等教育會

原色寫眞製版所

大隈伯邸菊花壇

小川一眞製

小川一眞製

東京專門學校長法學博士鳩山和夫氏

小川一眞製

理學士本多光太郎氏

講師淨田和民氏　　文學士岡田正美氏

みどりの牧場　よこぎりて
河は靜かふ　流れ行く
望みに滿ちて　已がじ一
青海原の懷に　いこひ求むる
それまでは

韓國京城　鳳凰生

小川一眞製

第二回懸賞問題の題意

獨逸學協會學校中學長
文學博士 加藤弘之君

麻布中學校長
江原素六君

妄想家

（第二回懸賞文第一等當選）

東京市芝區芝口一丁目　加藤龜

世の中には、いつも可成な望みを抱きながら、自分の力量相應な仕事さへ成し遂げ得ぬ人々が澤山ある、こういふ人々は何時遇つても　前途に何か見込のあるらしく、明日にも金の茶釜でも掘り當てそうに見える、それといふのは、つまり、妄想ばかりに耽つて居るからなので、一般に、此樣な人々には根氣が無いから起業心にも乏しく、唯だ〳〵明からの牡丹餅を待ち構へて居るばかりで、遂いうちに、親類の人が儲わけの金でも與れるだろうとか、然なくは、何か旨い事でも舞ひ込むだろうとかばかり思つて居る。

此樣な人々に、何時ちつとも、何かして見ようと思ひながら、空しく茫然して居るばかりである。だから丁度、出來上る見込も無い書物の趣意書と同樣、無駄に人々を待遠がらせるばかりで、金輪奈落、世間に現はれることは無い。

中等教育 修身講話

第一號

文學博士 坪內雄藏

開講に臨みて讀者に告ぐ

道德の修養に老幼の別なし

『中等教育』と一概に言つても讀者のうちには、中學第一年級程度のもあれば第五年級程度のもあつて智識の度も、經驗の量も、分別推理の力も、それぞれのゴから一樣で、ないから、一年級程度の讀者にちようど好い講話は、四年級、五年級程度に

易すぎて興味も薄く、利益も尠いやうに思はれるともあらう。こゝの鹽梅が
とか歴史とか博物とか數學とか英語とか言ふ、級を追ひ年齢を追うて次第に高
に次第に深遠に成りゆくべきたゞひの學科に於いては取りわけてむづかしい。
他の先生がたは、嘸お骨が折れようと思ふ。併し、幸ひに私が今度話さうと思ふ修
身談は、それとは餘程趣きがちがふ。修身科も實踐躬行といふことを第一にせず
して、純粹の理論の取調を專一にするときは、他の學科と同じようになつて、ヤハリ
級毎に難易深淺單複等の別が出來て甚だむづかしい學問となるが、敎へられて直
ちに實習すべきものとしての修身科は、其の實、存外に單純なもので、一年生の心得
べきことゝ、五年生の心得べきことゝの間に、別段に差別も無い。イヤ中學生が守
らねばならぬことゝ、行はねばならぬことは、取りも直さず、かく言ふ私共も守らねば
ならぬこと、行はねばならぬことで、其の義務、其の本分に、或は廣い狹い、或は小さい
大きいの別はあらうが、人の踏むべき筋道は、上中下に一貫して變はることは無い。
「二以て貫く」と孔夫子が申されたのは此の理であらう。かゝる次第であるによつ
て私は本誌に於いては、讀者諸子の年齢及び學識の差等などは聊かも眼中に置か

ず、皆一樣にかく云ふ私も一緒にこれから始めて道德修行に取り掛かるものとし
て話をするのである。即ち說くと同時に皆さんも讀んだいけのことは私しも實踐を試み、
讀むと同時に說いただけのことは私しも實踐を試み、
う假定して開講しようと思ふ。皆さんも、さう心得て「何だこんな小供に言ふよう
なことと」思はれることも、自分が實踐躬行し得たまでは、決して輕んぜぬよう、徒ら
に讀流してしまはぬようにして貰ひたい。

修身科と體操科—修身科の根本目的

さて講話に取り掛かる前に、念の爲め、もう一度繰り返しておかねばならぬ。抑修
身科は、今も云つた通り、飽く迄も實踐躬行と言ふことが目的である。學ぶや直ちに
實習し、知るや直ちに實行するといふことが此の科の眼目である。此の點に於いて
修身科と體操科とはよう似てゐる。外の學問は皆さんがよう覺えて、合點して平
生は頭へ納めておいて、いざ入用といふ時に持ち出して應用すればよいのだが修
身科と體操科とはさうでない。「右へ」と敎師が號令すれば右へ「左へ」と號令すれば
左へ即ち耳に聽いて合點すると同時に實踐躬行するといふが此の二科の特質で

修身 開講に臨みて讀者に告ぐ

ある。教師が「一、二、一、二」と言ふ時、一では手をあのようにするのだな、二では足を擧げるのだなどと、それを見て考へてばかり居るのではちつとも體育にはならぬ。右といへば直に右、左と言へば直に左を動かさねば甲斐が無い。まづ其の如くに、修身の方でも說く者も說くと同時に行ひ聽く者も聽くと同時に行はねばいけぬ。從つて教師もみづから今直に行ひ得ること、皆さんにも今直に行はしめ得ることを說かいでは修身科の趣意に戻ることである。要するに實踐躬行といふことが飽くまでも修身科の根本目的である。

體操教師が何事をも知らぬ頑是無い子に體操を教へようとしたならば是非とも先づ直立させねばならぬ、次ぎには左右前後の區別を教へねばならぬ。直立することさへ厭がつては如何ともしがたい又どちらが右か、どちらが左か、それが分からぬようでは顏を動かすをも、手を擧げるをも出來ぬ。それと同じで修身の訓を說くに當つても先づ初めに皆さんに少々注文することがある、且つそれと同時に一番惡いこと、一番善いことゝの大體の方針だけは示しておかねばならぬ。

修德の志—其の志の有無

「一番惡いこと」「一番善いこと」と言つても、今こゝで言ふのは教訓上の實際、實際も實際修身上のイロハ、實踐躬行すべきことの最根本に關して言ふので、無論倫理學上のむづかしい理窟から言ふのでは無い。苟も修身科を修めようと志す者、即ち假初にも人間となるの道を修めようと志す者に取つて最も宜しくない、此の病があつては迚も〳〵望みはないといふ程のことは何であるぞ、といふ位の意味である。

體操科に於いて眞直に突立つをさへ厭がる者に體操を習はせうとしても到底出來ぬ相談であるが如く、修身科に於いても、先づ最初に要するは「志」である。兎も角も教へられたをを實踐躬行しようといふ志教へられて善いと知つたことは行ひ、惡いと知つたことは慶めようといふ志此の志の無い輩は所謂緣無き衆生で、如何ともしがたい。譬へば朝寢をする、夜深しをする、間食をする、不規則な勞働をする、暴飲暴食をする、其の他あらゆる不養生を勝手次第に行つて、かりそめにも立派な身體、強健なる體格の人にならうといふ氣の聊かも無いような亂暴者に對しては、如何なる衞生家、如何なる老錬な體育家を雇つて來ても之れに養生の法を授け又は體育の術を誨ふべき工夫もないと同理で、何とそして立派な人物にならう、善

良な品性を得たい、豪傑になりたい、君子になりたいなといふ志の頭から無い、只々ラクラと意地なく、氣骨無く、ナマケてゐたい一點張の輩に對しては、到底德育の加へようも無い次第であるから、そこで「志の無いこと」を修身科に於ては「最根本の惡」と立てる。

五百疋の馬を川端へ牽いてゆくことは大層な仕事のようだが、これは隨分たつた一人の力にでも出來る。それ馬を綱で珠數つなぎにして程よく鞭をあてゝ牽いてゆくばかりのことだ。併しながら其の馬みづからの心に「水を飲みませう」といふ氣がない時に於いては假令朝夷奈樊噲、ヘルキュリーズの腕力を以てしても、たつた一疋の馬にさへ少しの水をすらも飲ませることが出來ぬ。イヤ廻向院の力士全躰を驅り催して來たとても駄目だ。恰もそれと同じで、一躰なら皆さんの頭へ倫理の智識即ち善惡邪正の區別位を注ぎこむだけの事は必しもむづかしくはないが、頭で讀む氣もなく聽く氣もないような連中に向かつてはそれだけのことすらも殆ど出來ぬ。これが「志のないこと」をば「最根本の惡」と做す所以である。

更にくはしくいへば善惡の區別を辨へようと思ふ氣の無い、其の區別は合點して

も、善を行はう、惡を止めようといふ氣の無い、物知らずと嘲られても恥ぢず、懶惰者、薄志者恥知らずと罵られても平氣で、聊かも發憤する氣の無いかような氣の無い盡くしを「最根本の惡」と立てるのである。かゝる輩は俗に謂ふ「グウタラ」「無神經」の徒、「薄志弱行」の徒で、孔夫子の「義しきことを見ながらも爲さざるは勇無き也」と申された其の勇無く意氣地なき徒で、即ち「遷善」の志無き輩で、人間としての卑屈者、臆病者、懶惰者、無恥者で惡德の最根本といふ點からいふと、一時の出來心で、殺人、强盜等の罪科を犯したものよりも一層惡い。之れを病に喩へて言はうなら、殺人や强盜は時としては、ふとしたのに比すべきこともあつて、療治の道が無いでも無いが、根本的の「薄志」「無志」は遺傳の難病が幼少から發したようなもので、殆ど救ふに道が無い。怖るべきの至りである。此の講話を讀んでくれる皆さんは、よくこの理が分からぬ人に對しては舌を動かすのも筆を動かすのも一切無益と思ふからである。

性と習—惡い癖の根本

修身　開講に臨みて讀者に告ぐ

蓋し孔子も申された通り、人間の持前、生得は大抵似たりよつたりであるが、其の幼少からの「習はし」の善悪で品性上に千里のちがひを生ずるのである。「習はし」とは俗に謂ふ「癖」のことで、最初は何でもないように思ふ癖が竟には募つて、自分ながら始末におへぬ悪癖となる。而して善い癖の第一着は「善と知りては其の方へ遷る習慣悪い癖の第一着は「悪と知りながらも同じ習慣同じ癖にこびりついてゐること」で、それが重なり〳〵て竟には「習ひ性となる」の諺通り第二の性となつて一生涯ぬけぬようになる。惰惰といひ粗暴といひ柔弱などいふ悪徳は、時としては遺傳又は病氣に基づくのもあれど、大かたは幼少からの悪い癖の結晶したのだ。隨つてそれと同じ道理で忍耐といひ勇敢といひ剛毅といひ謹慎といひ温厚などいふ善徳も、中には全く生まれつきに具つてゐるのもあるが、大概は皆幼少からの習慣の結果で具はるので、言はば善い癖の固着たのである。而して凡そ悪い癖の最根本は、前にも言つた通り、悪と知つて廢める氣なく、善と知つて行ふ氣のないといふ心癖に外ならぬのである故、わたくしは先づ皆さんにくれぐれも厳訓する。

「惡と知らば決して行ふな、善と知らば必ず行へ。」

此の戒をよく心得て下さい。もつとも「諸悪莫作、衆善奉行」など言ふ訓誡は佛教家も言ふことで、言ふまでもなく古い〳〵訓誡だ。併し私しのには「知らば」といふ一句がある。此の「知らば」といふ一句が眼目である。知らずして悪を爲す者は無智者即ち物知らずゆゑに、よしや、如何なる大悪事を爲すとも其の實は甚だ憫れむべきである。例へば三才の小兒が放火をしたやうなもの、頑是ないいたづらだと思へば憎みようもない。併し苟も倫理の教を聽いて、一わたりも二わたりも善悪邪正の理を心得ながら、即ち悪事と知りつゝも悪事を爲す者は、よしや其の悪事は小い悪事であつても、其の者の心根は甚だ卑しむべく、若しくは甚だ憎むべきである。無智者は時としては寛恕すべく、又時としては大に憫れむべきだが、知りて悪を爲すものは恕しがたい。而も古往今來世の中には善悪邪正の區別を心得た積りでよくは心得ず、或は不善を善と誤解し、それが爲めに思はぬ不埒を働くものが實際は悪と知りつゝ悪を爲す者よりも遙かに〳〵多い。善悪の別位は初手から解つてゐるように思ふ人もあるが中々さうでない。是れ先づ互ひに悪とは如何悪とは如何といふ倫理上の智識を修めねばならぬ所以

修身　開眼に臨みて讀者に告ぐ

である。随つて、わたくしの講話もまた主として此の點に重きを置く。皆さんも此の道理をよう心得て、次號から講ずることを熟讀含味し、成程、これは善いこと、これは悪いことゝ解つたならば何卒悪い方は廢止し、善い方は實踐躬行することに取り掛かつて貰ひたい。大丈夫皆さんによう解るように講ずる積もりであるから「よく解らなんだゆゑ」とは言はせぬ。又皆さんの資格でも直ちに實踐躬行し得られるようなことばかりを講ずる心得であるから、「いづれ其のうちに行ふ」とか「今は境遇や身分が許さぬから」など言ふ分疏は私しは決して容れませぬぞよ。此の約束をよつく呑込んでおいて下さい。

修身

人となる法

文學博士　坪内雄藏

目が横に附いて鼻が縦に附いて二本脚で眞直に立つて歩き這ふ蹲踞む坐る横になる飛ぶはねる走る引掻く摑むつまむひねる五本の指を一本々々に別々にも働かせる要するに手足ともに自由自在に働く、ふざけに哭く笑ふはいえむ先も角も無数の節を附けて聲を發する。これが常識即ち普通世間の俗眼で觀る人類と名づける一種の動物である。併し是れは單に猿猴類とは違つてゐる動物であると認めたまでのことで嚴正な意味で「人」「人間」「萬靈の長」なぞと名づけうとする時分には更にまた見方を改めねばならぬ。

普通[illegible]横目縦鼻で見かけだけは人間たるの資格骨相を具へて居ても、それは[illegible]それを精神上から見るときは更に種々の甚だしい段等があつて動物以下の[illegible]ければならぬ。最下劣が[illegible]以下即ち[illegible]以下の

である、隨つて、わたくしの講話もまた主として此の點に重きを置く。皆さんも此の道理をよう心得て、次號から講ずることを熟讀含味し、成程、これは善いことゝ解つたならば、何卒悪い方は廢止し、善い方は實踐躬行することに取り掛かつて貰ひたい。大丈夫皆さんによう解るように講ずる積りであるから、「よく解らなんだゆゑ」とは言はせぬ。又皆さんの資格でも直ちに實踐躬行し得られるようなことばかりを講ずる心得であるから、「いづれ其のうちに行ふ」とか「今は境遇や身分が許さぬから」など言ふ分疏は私しは決して容れませぬぞよ。此の約束をよつく呑込んでおいて下さい。

人となる法

文學博士　坪内雄藏

目が横に附いて鼻が縦に附いて二本脚で眞直に立つて歩き、這ふ蹲踞む坐る横になる飛ぶ、はねる、走る引掻く、摑む、つまむ、ひねる、五本の指を一本々々に別々にも働かせる要するに、手足とともに自由自在に働く、おまけに哭く、笑ふは、いへむ兎も角も無數の節を附けて聲を發する。これが常識即ち普通世間の俗眼で觀た人類と名づける一種の動物である。併し是れは單に猿猴類とは違つてゐる動物であると認めたまでのことで、嚴正な意味で「人」「人間」「萬靈の長」なぞと名づけようとする時分には、更にまた見方を改めねばならぬ。

蓋し同じく横目縦鼻で見かけだけは人間たるの資格骨相を具へて居ても、それは形體上の話で、これを精神上から見るときは、更に種々の甚だしい段等があつて、尠くも上中下の三級には分かたねばならぬ。最下級が並等以下即ち赤切符以下の

人間、其の上が並等の人間、其の上が並等以上。換言すれば、

(一) 凡人以下即ち廢物かたはもの

(二) 凡人即ち並の人徒の人

(三) 俊傑即ちずばぬけた人

斯う三級に分かれる。

さて、およそ人間と生まれいでたからには、誰れしも、先づ兎も角も並の人間即ち凡人にはなりたいと心掛くべき筈である。無論成らうことなら俊傑ずばぬけた善人、偉人、君子人、及ぶべくんば聖賢にも成りたい事は山々なれど、何事にも順序があつて、さう最初から滿點は得がたいから、せめて、先づ首尾よく及第といふ所に心を注ぐべきである。而して、それには、まづ人間としての及第資格と落第資格とを、明らかに合點する事が必要である。

落第資格の人間即ち凡人以下の人間も、形體上即ち骨相上から見れば及第資格の人間即ち凡人と別段の違ひも見えぬが、精神上から見るときは、大分の差違がある。而して、真人間にならうと志す者は、先づ、兎も角も此の「廢物」「かたはもの」といふ境界

だけは脫却してかゝらねばならぬ。

凡そ、人間としての落第資格に二大別がある。一は精神上の「かたはもの」である爲めに落第し、一は精神上の「未熟者」である爲めに落第する。不具は形體上でいへば旨や唖のようなもので、これは殆ど據ない、是非に及ばぬ。原因が當人の意識以外、又は生まれぬ前にあるのだから、當人の心掛で以て如何ともしがたい例が多い、イヤ、直さうなぞといふ心掛が頭で生じないのが、かゝる不具者の持前であるから是非がない。例へば、彼の生得の白痴即ち英語で謂ふ idiot の如き、これは、往々にして只の猿猴なぞよりも遙かに愚かしいことがある。又は、彼の狂人、精神病者、これまた、人間としては、落第は勿論のことである。人間としては十點二十點以下か、多くとも三十點以下であらう。

さてまた、未熟である爲めに、まだ真人間にならぬ例の第一は小供、第二は野蠻、未開人。至極の下等社會併し、これもまた自分で、求めて落第するのでは無く、さうなつたのは、自然の理法だから止むを得ぬ次第である。どんな文明國民でも、嘗て一度は未開人でもあり、野蠻でもあつたらう、イヤずつと〳〵大昔は、黄人種も、白人種も

四脚でこそ這はねキャッ〳〵とこそ啼かねど大分猿とのに似た面附までしてゐた
に相違ないと思はれるによつて——また、どんな學者でも豪傑でも聖人でも賢人
でも彼の老子のように生れ落ちるとから白髪の賢人又は基督のように神怪不思
議な神の子か何かでない以上は兎も角も一度はオギャア〳〵の時代うま〳〵た
い〳〵チヨチ〳〵アワヽの時代があつたに相違ないから——何も此の意味での
「未熟」は深く氣にするに及ばぬ。幼稚なるが爲め未開なるがために云ふ此の意味
での「未熟」で一時落第したからとても敢て愧ぢ歎くにも及ばぬ。がこゝに今一つ
別種の「未熟」がある。此の「未熟」こそは我々共一同が最も戒愼して取り除かねばな
らぬ「未熟」で苟も此の失が附帶すれば到底眞人間となることは出來ぬ。凡人即ち
並の人間尋常一樣の人間にすら成ることが出來ぬ。
生得の白痴である爲めに人間になれぬのは遺傳の故だから是非がない。精神病
のために世の廢物となるも病の所爲だから是非に及ばぬ。未だ敎育を受けぬ爲
め身躰や精神が發達せぬ爲め、まだ並の人間になり得ない、これもまた據ない次第
である。未だ曾て文明の恩澤に浴せぬそれゆゑに野蠻蒙昧の區域を脫せぬ未だ

曾て眞僞美醜善惡の別を敎へられたことが無いそれゆゑに道に志す心も起こら
ぬ依然として禽獸に近い生活をする。これもまた止むを得ぬ次第である。併し、
若し爰に此の四種以外に單に自分の心掛のよろしくない爲めばかりの故に、いつ
までも〳〵眞人間になり得ないものがあつたら如何であらうぞ。思ふに是れこ
そは落第者中の最も罪深いもの、且つ最も愧づべき者であらう。古往今來此の質
の輩に限つて到底人にはならぬ凡人にも成り得ぬ惡人にすらもなり得ぬ。不具
者でもなく病人でもなくつて居て世の廢物となる。敎育を受けても文明の恩澤
に浴しても少しも利することを知らぬのは此の質の常である。
「それは果たしてどのような性質の人間イヤまだ人間にならぬのならば、どのよう
な性質の人類的動物であるぞ」と讀者諸子が反問せうとするであらう。「果たして
そんなケブな動物が世の中に居りますかいなぞと講者をチャカさうと試みる讀
者も或はあるかも知れぬが實際在る、而もつい我々の鼻の先にゐる。さう言ふ諸
子のうちへも折々こやつが潛りうつる。油斷をすると誰れにでもとつつく。
其の怪物の名は何といふ？曰はく、

猿人となる法

薄志弱行！

又の名はイクヂナシ別名はグウタラとも言ふ。此の根性が増長したら、到底眞人間にはなれぬ。殆ど並の人間、徒の人にもなれぬ。文明人も此の惡魔にとつつかれたらもうれしまひ、野蠻未開に退歩し墮落する。學者でも才子でも善人でも君子でも、この惡魔に憑りうつられたら最後、次第々々に墮落する。鴆毒よりもこわい。バチルスよりも怖ろしい。

薄志弱行！こやつにとつつかれたら賢人でも聖人でも駄目、補正成でも、加藤清正でも西郷隆盛でも駄目だ。薄志弱行で口先ばかりの孔夫子！薄志弱行で恐耐力も勇氣も熱誠も無い補正成！何とどうだ。そんな輩が何にならうぞ！

さて、かように見來たれば我々共が眞人間にならうと志ずに當たつて、先づ取り拂はねばならぬのは、此の「薄志弱行」といふ惡癖だか、如何にしたらば之れを除くことが出來ようか。そも〳〵、

薄志弱行の根本

は何であるか。眞人間になる最初の資本は何であるか。藝術はアイウエオから

習ひはじめる。美術は加算から習ひはじめる。人間とならむとするには先づ何からはじめる。まづ第一に習得せねばならぬものは、

根氣！

である。くはしくいへば、物事にじつと氣をつめる癖即ち種々の事物に氣を散らさぬようにして或一事或一物にじつと精神を注ぐこと、更に手早く言へば物事に注意する習慣、これが人間となるための最初の、而も最も大切な資本である。宜しいか、こゝにいふ根氣は恐耐の義ではない。恐耐といふ程の重い意味ではない。只はんのじつと注意する氣力といふ程の意味である。

夫れ白痴即ちIdiotの最も著しい特質は根氣のまるつきりないことである、其の最も甚だしいのになると飲食するために手足を働かすことさへなし得ないと言ふ。「氣をつめて働くよりは死んだ方がよい」といふは、馬鹿の人情だといふことは、種々の事實によつて證據があがる。蓋し、白痴が眞人間になり得ぬ所以の原因は主と

して此の根氣の絶無なる點に存する。聽く根氣がなく、見つめる根氣がなく、無論習ふ根氣が無いゆゑ、到底敎育することが出來ず、隨つて生まれながらの馬鹿で終はるのである。詳しいことは、王子の瀧の川園へ往つて聽いて御覽全くさうだ。さてまた狂人が眞人間とちがふのも半以上は此の根氣即ち一意專念の心癖の缺乏してゐる點に存する。又彼の幼年が大人に劣り、未開人の文明人に劣る所以も、主として此の一意專念の習慣の乏しいのに原因する。要するに馬鹿は丸きり根氣が無く狂人はすぐ氣が變はり、小兒はおちこちへ氣を散らし、未開人もすぐ根を疲らせる。ウヰットやニュートンのように一心不亂に物事を考へるなぞといふことは、未開社會には決してない。根氣即ち一意專念の心癖は、人の人たる所以の、根本の美德である。これがなければ到底眞人間どころか、並の人間にもなれぬ。根氣さへあれば、如何程に無智でも無才でも棄てたものでない。下等動物と雖も多少根氣を有するたぐひのものは、敎育して幾らか人間に近づけることが出來る。犬や象や猿なぞが好い例である。彼等は他の下等動物に比べると餘程根氣即ち注意力に富んでゐるそれゆゑに幾

分か仕込むことが出來る。然るに此の心癖の聊かも無い動物は、何樣にも敎へようが無い。

擔滴石を穿ち燒點物を燒く。一念凝つては岩をも透すが、萬能は足つても一心が足らねば何の役にも立たぬ。古往今來、人間の功績は悉く皆根氣の生むところである。アークライトが紡績器械の發明も、デーヴィーが安全燈も、デュナアが種痘術も、モオス、ホイートストーン等が電信機も根氣に負ふ所最も偉大だ。蓋し根氣すらなきものに忍耐力のあらう筈なく、勇敢の氣のあらう筈なく、熱心などのあらう筈もない。

以上は勿論いひふるされた敎だが、いひふるされたに拘らず、萬古不易の敎である。

即ち、人間となる第一着は根氣即ち

氣を一事に專注すること

である。これが出來ぬ徒を英語で Scatter brained と言つて最も淺ましいものとする。俗に謂ふ、ウハ〳〵した人だ。何事にも氣がとまらぬ故、何事も得覺えぬ、見ても聽いても直ぐ忘れる。根氣のない人は必ず記憶のわるいものだ。

何も生まれつき記憶力が乏しい譯では無いが、氣をとめて見聞せぬゆゑに感銘が薄く、隨うて、すぐに忘れるのである。

ニュートンは自分の他人に勝る所以は單に注意力の一點に在りと言つて居たと言ふことだが、英の小說家のディッケンスもまた、我が成功の第一の秘訣は我が注意力の人に越えたる點に在つたと言つてゐたと、或書に書いてあつた。ウィルモットといふ人もまた曰うた、注意力は神才を造る。あらゆる學識、あらゆる風雅の才、あらゆる科學上の發明皆之れに基づく」と。併し、これは言ふまでもなく言ひ過ぎた言葉で、偉い人達の功績は注意力ばかりの賜ではない。注意力即ち根氣さへあればそれでよいといふ意味で無いことは無論だが、せめても、多少の根氣があれば、兎に角敎へて貰ふことが出來、習ふことが出來、隨うて兎も角も自分の口を糊する位の職業を習ひおぼえることも出來て自立自活の道を立つることが出來る。曲りなりにも自分の才覺腕前で自立自活することが出來れば、もう一個の人間だ。白痴でなく、狂人でなく、小兒ではない。或は文明人中の尋常人でないかも知れぬが、凡人の境には這入つた者と見做すことが出來る。人生まれて物心を知るに至つ

た以上は、是非とも、こゝまでは先づ漕ぎつけねばならぬ。

然るに、世間を見ると、中學程度の敎育を受ける身分になつて居ながら、尙ほ、一時間と、同じ課目に氣をつめる事が出來ぬ、イヤ二十分、イヤ十分の間すらも、イヤ〳〵出席簿をつける間だけもじつと氣を一事に注いでゐることの出來ぬウハ〳〵した生徒がある。書物を讀み、雜誌などを讀むに當たつても、おちを開いて見、こちを覗いて見ちつとも心の纏まらぬ讀者もある。今は畫筆を持つかと見れば、直ぐにまた作文にかゝり、やがて忽ち英語を讀みはじめる。程もなく外へ飛び出して自轉車に乘る。淺草へ往きかける、忽ち芝へ向かふ、かと、見ると、又おやめだ。そんな徒を往々にして見かける。いや〳〵鬚の生へた人にも、ちつと位は此の氣味の人があらうて。政治家になつて政談をやるかと見ると宗敎演說をはじめる、かと見ると官吏に化ける、著述家になる、出版屋に化ける、敎育家になる、また商人になる、剩へいろ〳〵に商賣がへをする。一つとして成し遂げたことはない。二年と仝じことをしない。そのうちに老爺になる、死ぬ、骨になる——化けて出る——といふ譯にはゆかぬ！だから、せめても

根をつめるだけの修行はして、兎も角も並の人間までは漕ぎつけて、一生のうちに何かせねば、人といふ横目縦鼻の高等動物に生まれて來た何と、甲斐がないではないか？

勵むときには、よく〳〵勵め、
つゆも心を散らすな、餘所へ。
當たる仕事に、全力盡くせ、
中途半ぱに遊ぶもむだぞ。

兎二正を、一度におへば、
二正ながらをえ捕らぬためし。
一つ時には、仕事も一つ、
心ちらすな、いろ〳〵に。

諸子が根氣の強弱は、必ずしも他日の試驗をまたぬ。此の『中等教育』一冊を讀過するうちにも現はれようから、自分で試驗して他日の自戒となさるがよい。

豪傑になる法

文學博士　坪内雄藏

「智過万人」者謂之英、千人者謂之俊、百人者謂之傑」といふ書に書いてある。して見ると「傑」といふのは百人中の一人といふ位の意味で、通例英雄豪傑と熟して用ゐる時程にエライのではない。私がこゝに用ゐるのもそれで、並の人以上、徒の人以上、平凡以上の人物といふ意味に外ならぬ。

先だつて話した通り、

根氣をつめる癖

即ち一つの事に心を專注する習慣さへつけば、兎も角も並の人間にはなれる譯だが、しかし、只並の人間になつたばかりでは、言はゞ辛うじて自立自活即ち父母の脛をかぢらず、他人の厄介にならないで生計してゆくことが出來るといふまでのこ

とで譬へて見れば將棋の駒の「歩」のようなものだ、只眞直に一歩づつあるき得るばかりで、其の作用が甚だ狹く、甚だ小さく、少し強い奴にぶつかると忽ちに呑まれてしまふ。はかない、脆弱い、いくぢのないものだ。併し、そのはかない「歩」も一旦「成る」といふと一廉の士官の作用をして、時としては敵の將軍をも辟易させることもあると同じ道理で、並の人間と豪傑との間に何も乗り越えがたい高塀や石垣があるではない。十人中の一人、百人中の一人になるとならぬとは當人の心掛次第である。『淮南子』には譬ばかりが人間の等級を定めるかのように言つてあるが、それは畢竟言ひかたが粗大なので、どうかすると誤解を釀し易い。智も大切、情も大切だが、まづ

第一に大切なものは意志

である。意志の強弱が人間の等級を定める地盤で、又は土臺石で、智や情はそれを固めるセメント乃至その上へ積みあげる煉瓦石などに比すべきもので所詮豪傑と凡人との區別は主として意志の強弱で定まるのである。

彼の砂原や埋立地のまだよく固まらぬ處などへ三階四階の大きな建物を築きあげることの骨折損であるが如く、意志の薄弱な、張の弱い熱の無い、ぬらりくらりとした人間には、何事を教授しても駄目、何事を修行させても駑馬の耳に念佛、燒石に水、豆腐にかすがひ、糠に釘、暖簾に向つて腕押を試み、底のぬけた釣瓶で井戸替の手傳をはじめるようなもので、詰まるところ骨折損の草臥もうけ、何の甲斐もないことだ。それゆゑ苟くも凡人以上の人間にならう、なりたいと思ふ當人はいふまでもなく、ならせてやりたいと思ふ教育者みづからも、是非先づ一通り其の當人の意志の強弱を檢察せねばならぬ次第である。而して此れは必ずしも他人に檢てもらはねばわからぬといふものではない。譬へば、風邪ひいた時分に熱が出たか如何かは略自分診察でもわかるようなもので、自分の意志の強弱位は、少しく反省すれば、自分でもよう知れる。所謂「自脈」でわかる。さて自脈をとつて見て、「おれは意志が強いなといふことが自慢ではなく、しかと信ずることが出來るようなら先づ以て頗る頼もしい。蓋し意志の強い者ならば、善豪傑か惡豪傑かは第二の問題として、慥かに「豪か「傑」にはなれるのである。併しながら万一其の反對で「オヤ〳〵おれは意思が弱い、イクヂなしだな！」といふことを自分ながら認めざるを得ないよ

うでは甚だ前途が覚束ない。そんな手合は迚もエラモノになれぬのが通例だ。

先づは、凡人で甘んずるより外はない。

併し「アヽおれはいけない！意志が弱い、イクヂなしだ！」と自分で思つたからとて、何もあはてヽ失望し絶望するには及ばぬ。何となれば、さう氣が附いたのが、取りも直さず心を入改る緒で天の助けだ。凡そ此の世の中で最も憫れむべき廢物は、意志薄弱の生得でありながら其の薄弱たるに心つかずに、見事人並の積もりで自惚れてゐる手合である。そも〳〵自惚は慢心のもと、是れでもう澤山だといふ根性即ち滿足、安心、立往生、立腐れのはじまりで、いつまで經つたとて先へ進みつて行けるものでない。「アヽおれはいけない、意志が弱いから！」が無いゆゑ、ツマリは退歩するばかりだが「アヽおれはいけない、意志が弱いから！」と、かりそめにも心附いたなら、それが即ち天の賜である。奮つて其のイクヂの無い心に打克たうといふ精神さへ振起さうものならそこに忽然として乍のうちに強い意志が成立つやうにもなる。精神一到何事か成らざらむやだ。病氣も氣から出れば、イクヂなしもツマリ大概は自分の氣の所爲だ。奮發して追拂はうと思へば三度、四度、六度、七度とせりあつてゐるうちには早晩ふつぱらつてしまふことが出來る。何事も癖だ。決して〳〵絶望してはならぬ。

それにつけても、自脈を取つて見て、豫め自分の意志の强弱を知りぬいておくことが必要だが、どうしたらそれを知ることが出來ようか。けふはその自脈法を話さう。名つけて意志强弱自脈法といふ。えらい名だ。

先づ第一が

忍耐力の有無

を診察するので「自分は忍耐力に富んでゐるか、どうか」といふことの自脈を取つて見る。よしんば多少の根氣があつて心を同し事に專注することが出來たとても、それがホンの十分か二十分で、もう一時間以上となると、根を疲らし、のびをするやら、アクビをするやら、目をこする、鼻をいぢる、尻もぢ〳〵の足ばた〳〵といふ風で、少しも忍耐がなく要するに聊かでも苦しくなり、つらくなるとやめるようならは、それは即ち忍耐が無いので意志薄弱の第一徴である。

そも〳〵人間の他動物に勝る若しくは異なる第一の特質は所謂自制克己。換言すれば自分の心で自分の心を制へること、一言でいへば「忍耐」といふ美徳の裕か

なるに存するのである。英語で Patience（ペーシェンス）といひ、Perseverance（パーセヴィアランス）といひ、forbearance（フォベアランス）といひ、fortitude（フォーティチュード）といひ、abstinence（アブスティナンス）、temperance（テムペランス）といひ、Self-control（セルフ コントロール）、Self-command（セルフ カマンド）といひ、Self-denial（セルフ デナイアル）といふ、皆同類の美徳の別名で、

忍耐の定義

を最も平たく而も最も幅廣く解すれば「自分の心に大小二つの志望情慾が起こつた時に其の大なる情慾大なる志望を遂げようがために其の邪魔となり障害となる小さい方の情、卑しい方の慾を思ひ切つて耐へる、棄てる、擲つ」是れを名つけて忍耐といふのである。例へば寒い〳〵冬の朝、布團にくるまつてねてゐると快い心持だ。もつと〳〵寐てゐたい。「もう時間ですよ、學校へゆくのですよ」と起こされても寐てゐたい。併し學校へ往きたいといふも我が情慾。寐てゐたいといふも我が情慾。此の二種の情慾が衝突した時に奮然一時のつらさを耐へて蹶起きる是れが即ち一種の忍耐。それから戸外へ出る、風がヒユー〳〵と吹く、雪がチラ〳〵と降りだす。鼻先がちよんぎられるように痛い。その痛さ寒さを忍耐して、ふるひながらも學校へゆく。これもまた一種の忍耐。

寒いのに克つも忍耐、熱いのを耐へるも忍耐、怖ろしいのを恐ぶも、羞かしいのを耐へるも懶惰たいのを我慢するも、飲みたい、食ひたい、遊びたい、冗話がしたい、悪口がしたい、高慢が言ひたい、泣きたい、笑ひたい、怒りたい、ぶんなぐりたい、蹴飛ばしたい、叩きちぎきたい——要するに、如何に肉が燃えるように感じても、手足を切り裂かれるように感じても、息がとまるよう、死ぬるように苦しくても「これは是非我慢せねばならぬ」と思へば歯をくひしばつて忍耐する、それが即ち忍耐である。忍苦即ち、つらさを忍ぶ」といふも忍耐、節慾即ち「快さを程々にする」といふも忍耐。

忍耐は根氣の功勞經

盖し苦痛に出逢うてもめげずおそれず、へこまず、たゆまず、ちぢまぬ強烈な根氣又如何なる誘惑に逢うてもゆるまず、荒まず、蕩けずでれつかぬ堅牢な根氣——我が大志を貫かむが爲めには如何なる大恥辱をも忍ぶ、彼の淮陰の市に於ける韓信の如き、喜劍に對する大石良雄の振舞の如きはそれである。それが所謂恥辱是男兒の意氣覺悟である。或は狂人と呼び痴人と喚ぶをも耳朶にかけずして、せかず、急がず

修身　忍耐になる法

ず虚名に渇することなく、小利に惑ふことなく、小成に安んずることなく、十年一日の如く、忠誠に、摯實に、汲々として心永く如何なる艱難辛苦をも忍びてゆくのが志す所の一事に從ふ古今の立志家、發明家、改革家一總じて時流凡俗を超脫して新事業を成就した人々にして古往今來一人として此の境を經ぬものはない。笑はれるからと云つてはしよげ、非難されるからと云つて躊躇するような辛防力の弱い料簡方では迚も〳〵豪傑にはなれぬ。假令火あぶりの刑に處せられても自分の堅く信じたことは決して〳〵改へぬといふ東西の宗教家、道德家、學者、例へば羅馬帝政時代の基督信者、中古時代の大理學者、信長に對抗した日蓮宗徒などー一々例を擧ぐるに遑がない。

之れを要するに忍耐とは一時のつらさ苦しさ、怖しさ、悲しさ、寂しさ、はづかしさ等を忍ぶ心乃至一時の遊びたさ、なまけたさ、衰められたさ、すかれたさ、食ひたさ、飲みたさ等を耐へる心にはじまつて貧苦に安んじ、患難に安んじ、世に知られざるに安んじ、死に安んずる心に達して極まる。何と、忍耐といふ德も浩大なものではないか。咄嗟から古今無双の雄辯家となつたデモステネスも、自活獨修して大學者となつた

なつたフランクリンも、徐ろに時機の到るを俟つた家康も、草履取より經上つた秀吉も、四十日斷食の基督も、十年苦行の釋迦牟尼も、いづれも皆此の意味の忍耐を種々の方面、種々の時期に幾たびも〳〵經て卒業せられたものである。

「己れに克つて禮に復る」といふも一時の我慢自分勝手をこらへる心より生ずる美德で「身を殺して仁を爲す」といふのは、此の意味の忍耐が其の頂上に達したのである。さう解釋すれば、殉難も、獻身も皆忍耐の大なるもので顏回もソクラテスも皆忍耐の子だ。彼れらは其の最大最高の目的の爲めには命を獻げるのをも甘んじたのである。それを思へば彼の晏起をすら思ひ切ることが出來ず、間食を食ふのをすら我慢することの出來ぬ手合は、迚も〳〵豪傑にはなれぬ「酒や煙草を用ゐるなと戒め「之れを用ゐることを耐へよ」といふは必ずしも酒や煙草が有害であるからといふ意味ではない。耐へることと其の事、忍ぶこと其の事が

克己獻身の修行

で、取りも直さず豪傑になる稽古であるからなのだ。然るにさうとは悟らずして、或は數員や巡査を恐れずして禁を犯すのをば見得名聞のように心得、幼少の癖に

得々として巻煙草などを吹かす輩の其の愚かな心根があさましい。まだ癖がついてからタカが二年とは經たぬ程であらうのに、其の短時期の惡習慣にすら克つことの出來ぬようなイクヂなしなら、此の生存競爭の猛烈な世の中へ出たとて何が出來ようぞ。要するに節慾の試驗に煙草をやめ、あさねをやめ、間食をやめて見る程の意地、忍耐さへない輩は、取りも直さず「私は豪傑にはえなりませぬ！」といふ自白の大々的廣告を出してゐるも同然だ。さて〳〵あさましい！

忍苦の稽古

を試みぬ手合が淺ましい。ちよつとしても泣く兒を我が國では「泣蟲」といつて卑しみ英國でも "cry baby" といつてさげすむが、十五六以上になつて泣きこそせね、精神に於てはそれに類するのが往々にしてある。一寸した苦痛をもえ忍ばず、一寸した怖ろしさ、恥かしさをもえこらへず逃げたり、避けたり、でまかしたり、うそをついたり一畢竟虚言をつくは、叱られるのや、責められるのや、恥しめられるのを怖れる臆病心から起きるので、即ち忍耐がないからである。豪傑にならうといふ志があるなら些細な忍苦からはじめて稽古することだ。その習慣が固まれば大々

的忍苦もたやすうなる。佛教の坊さまが種々の戒を守つたり、肉食を禁じたりして難行苦行をするのは全く忍耐の稽古に外ならぬのである。忍耐と節慾とは豪傑になる準備の二つの大きな土臺石である。

それゆゑにこそ古人も「忍耐は智識に勝る」の「忍耐は天才だ」のと言つた。グラッドストンの競爭者であつた大政治家のディスレーリも「忍耐は天才に必具の要素だ」と言ひ、ニュートンも「わしが成功したのは畢竟忍耐つよく長い〳〵間熟慮工夫したからである」といひ「時と忍耐と金とを以てせば天下何事か成しがたからむ」と西洋の諺にもいひつたへてゐる。

併しこれはちと忍耐の効能を持上げすぎた評で、忍耐は主として消極的の美徳であるから單に忍耐だけでは「豪」は出來ようとも「傑」は往々にしてむづかしい。イヤ「傑」は出來ても「俊」「英」といふところまでは漕ぎつけられまい。そこで苟くも大志を抱く者は是非

もう一つ大切な美徳

を身に備へねばならぬ。何ぞや？曰はく勇敢！

この勇敢ということについても大ぶ話したいことがあるがツイあんまり長くなつたから、けふは先づこれぎりにして、いづれまたの日何か例話を加へて改めて說明しませう。（以下略）

勇の本義と其の三大區別

「勇」とは最も強き意味に解すれば「意地強きこと」これなり。おのれが爲すべしと定めたる事たる以上は如何なる障害をも憚ることなくして敢行する意地あるをば「勇」といふ。其の根本の意味より言へば勇は彼の儒家の教ふる如く必しも絕對的に美德なるにはあらずして相對的の善、方便上の善なるのみ。勇の本義は爭鬪するに「大小二種の欲望の時を同じうして生ひたる時、大なる者しくは卑劣と思はるゝかたの欲を制する諸德の總名」なり。即ち克己と同意義に解するが正當なるべし。勇に三大階級あり。初級の勇を盲勇といふ。最劣等の勇なり。第二級のを悟勇と假稱す、何等か悟む所ありて生ずる勇なり、或は常人の勇とも稱すべし。第三級即ち最上の勇を眞勇といふ。義の存するところ利害成敗を度外にして直往するの勇なり。古今東西の道德家の所謂勇、儒家の所謂勇なり。

（「中學世界」所載坪内博士述「勇の三大別」の一節）

修身

偉人の三つ道具

文學博士　坪内雄藏

霞をくらひ霧を飲んですらも仙人といふものは生きてゐるといふから、仙の字氣を離れた我々とても、水と米麥のたぐひさへあれば命だけは繋がれることであらうが、さりとて只だはんの生きてゐると云ふばかりではつまらぬことだ。イヤつまらぬ、つまるは一身上の事で自分の勝手なれど、此の萬歳一遇の二十世紀、東洋三千年、西洋三千年の雨文明が端なく鉢合をしたといふ此の明治年代に、圖らずも滿足な人間と生まれいでた任務若しくは職責といふものが盡くしがたいではないか。例を以て申さうか。爰に東京府下の王子村に某といふ老坊師があるげな。それが此の何十年來悉く火物を禁て純粹に菜食して、それで毎日々々怠りなく庵室一切の仕事を勤めてゐて、勸化もすれば祈禱ようのこともする、庭掃除もする、頗る健康だ。併し聲だけは酷くつぶれてゐるゆゑ、傍へ近寄らねば何をいふのやら

聞きわけにくいといふことだ。又上野公園邊の或寺の坊さまで大ぶ活潑な昔ながらの戒行家があるげな。妻帶は無論せぬ、腥いものは一切食べぬ、而も寺務一切は言ふに及ばず、多年の慣習となつてゐる限りの職責に對しては、大ぶ社會的方面へ向かつても活動するといふのであるから、兎に角前の老法師に比べては世間的にも働く。それで食物は精進ごくめで濟むといへば、一日ヤハリ三食で而も副食のすくない代はりには飯をかへること間々十何椀にも及ぶことがあるそうな、何と大食ではないか。さりながら、考へて見ればこれは何樣さうもあらうか。主として米許りからあらゆる必要なる滋養分を得むとするのであるから、自然夥しい分量を要するのであらう。その理は糸講師にお聞きなさいだが、毎日三度十椀内外を消化するのであつて腸胃は大骨折消化すので草臥て氣力が疲れて、特に物たべた當座しばらくは牛や豚のようになつてしまふであらう。蓋し、ほんの恒例の仕事(Routine)を半機械的半無意識的習慣的にしてのける分の事なれば、米と水と野菜とがあらば足るようなものだから、日進月化の今日百難千難を冒し足よりも手を、手よりも頭を使つて臨機應變の工夫を凝らし百折不撓の氣力を錬つて晝夜粉

骨碎身自利的兼利他的國家的兼世界的の幾多新事業に當たり、且つ之れを成し遂げようといふ大志望を抱く身にとつては更に他に何か滋養分を需めねばなるまい。丁度それと同じ道理で只だ一身の獨立自活だけを目的としたならば根氣と恐耐と此の二種の美德があつて、そして社會に對して分相應の義務を守り決して他人の權理を犯さないといふ謹愼(prudence)の德さへあつたなら、道德上から見て普通の良國民たるの資格はあらうし、時としては相應に世間にももてはやされて一種の俊傑と見做さるゝようなをも出來するであらう。所謂獨立自尊を標榜にしてゐる手合のうちで往々にして此の消極的俊傑程度に固結まつてゐる輩が尠からずある。併しかくの如きは未だ〳〵眞の俊傑ではない。況んや偉人大人達人などいふものの系統でなければ緣者でもない。

若し夫れ苟も眞の偉人たらむとするものは根氣と恐耐との外に是非とも下に語る三つの道具を單に利己的としても具へねばならぬのである。それは丁度虎に於ける爪牙鷲に於ける嘴翼だ。共に是れ强烈堅固な意志の力の產む所で、彼の薄志弱行の骨なし男や女の腐つたのに似たエラクラものなどの夢にも具ふること

能はざる鋭利の武器で、無論善事には用ふべく又惡事にも用ふべきもの、隨つて一たび人たるの眞目的に於て誤るをあつて之れを用ふれば其の結果最初は己れに利あれども他の人々には害を與へ後には廣く社會一般を害すると同時に竟に又己れをも害するに至るといふ、それは〳〵怖ろしい鋭利の武器だ。善人にまれ惡人にまれ古來「偉」といふ形容詞を世間から得たものに此の三つの道具を具へぬものはない。强盜の首領だとか(盜跖)逆賊の張本だとか(將門)破倫自極の暴君(清盛、シーザル、ボルジヤ)だとかが往々にして事理に昏いともがらに畏敬せられるのみならず相應に識學見のある手合にすら推重せられむとする傾あるは畢竟ずるに此の三つ道具の餘光たるに外ならぬ。道具はあくまでも道具で決して絕對的に善美ではないのだ。蓋し其の持主をして道德上の偉人即ち善偉人たらしむると利己一邊の偉人即ち惡偉人たらしむるとは其の道具の用ひかたと用ふる本意と用ひた後の效果次第で定まるので、それを取り調べた上でなくては決して輕々しくは褒められぬ筈のものだが、そこが俗の習ひで、大抵はそんな面倒なことは考へず、只だ此の三つの道具の影さへ見れば半無意識の間に惡にも强ければ善にも

强からうと豫想して、さながら三尊の阿彌陀樣でも拜んだかのように恭がり有難がるが習ひであるが、さて其のさほどに尊い三つの道具とはそも〳〵また何樣な品であるぞと云ふと old, old, story! ちつとも珍らしい話ではない。希臘は今より二千四五百年前東洋は今より三千年近く前から幾たびも〳〵ほのめかされてあつた訓だ。曰はく勇敢なれ、曰く競氣旺盛なれ。

一たび是なりと信じては之れを斷行するに當たつて水火をも辭せず刀彈をも避けず、鼎鑊をも怖れざる大勇氣、而して万が一にも我が信じたる事が道に叶はずと悟り知ることあつた時には如何なる不利をも大恥辱をも危險をも怖れずして斷然として改悛し廣く世間に向かつて之れを表白する事を憚らざる大勇氣是れが一つ。又一たび事に當たつては一心不亂全身傾注醫へば絞るが如き、食ひ入るが如き、燒くが如き、燃ゆるが如き熱心、決して片手間的に事をせず、決して休みながら働かぬ、中途半端的でない (not half-hearted, not single handed, never doing things by halves) 的の熱心働く時には悉く遊ぶ時には悉く遊ぶ何事に對しても卒爲るといふ場合となつては半眼的でない

No half vsion, 睡眠的でない No sleepy eyes, 曖昧模糊的でない No dawning sense, 悉皆を手に入れるか然らずんば悉皆を抛たうといふ程の熱心、"all or nothing" この意氣込要するにおのれが任務、職業に全身 "whole self" を打ち込む熱心——是れが即ち古往今來の偉人たちの人物の第二の利器。

さて第三の利器は——「おのれが志す事業に對して毎に圓滿を追求し理想と角逐し、長へに飽くことなく倦むことなく弛むことなき競氣」——これは少々特別の説明を要するのである。三つ道具のうちでも勇氣と熱心との効用は古來殆ど言ひふるされてあるから、只だ其の名目さへ掲げておけば人々がおのづから合點し自省するであらうによつて、今更繰り返して說かうとも思はぬが競氣の事だけは自分が新見に近いから、左に一通り說き明かしておきませう。

こゝに競氣と名づけたは「爭心」「妬心」などいふ惡い意味を含ませたのでなく、凡そ人たるものが生まれながらにして具へてゐる一種の生欲としての競氣、即ち俗に謂ふ「勝氣」「まけじ魂」で、人間はこの生欲あればこそ、或は猛獸毒蛇と競爭して勝ち、或は風雨寒暑其の他の天變地妖と競爭して勝ち、或は一段不道德な蠻族、一層禽獸に近い劣等人種と競爭して勝ち、次第々々に進化し改良し遷善し、尙は甚だ不完全ながらも兎も角も文明的と稱せらるゝ今日の有樣に達したのであるとすれば、單にこればかりの說明によつても競氣の大切なる事は明らかであらうと思ふ。即ち人と生まれては多少の競氣の生まれながらに具はつてゐないものはあるまじき筈、万一にもあらばそれは不具者で凡人以下に位すべき手合だ。然り多少の競氣は誰れにもある、只だ其の度合と品質とによつて、只だの男か豪傑か乃至偉人か至人かなぞいふ位附が定まるのである。

夫の八百ヤードの競走に負けまいと氣を揉むも競氣の作用なれば級中の最上位を占めて優等生たるの名譽を博したいと努力するも競氣の作用、彼れも人なり我れも人なり、舜何人ぞやといふ氣意込で、おのが專門の事業に關して古今の大家名家と角逐せむとするも競氣なれば、おのが不善に愧ぢ他人の不善に慚ぢるといふ、佛家の慚愧、賢を見ては齊しからむを思ひ、不賢を見ては內に自ら省るといふ、儒家の力行、いづれも競氣の作用たるに外ならぬのであるが、ひとり其の品質の大小高卑に至つては、一に其の人の目的如何にあるが故に、同じ競氣の作用ながらに、甲は

其の持主をして卑劣至極の小人たらしめ乙は兎も角も傑人たらしめ丙は君子、丁は賢哲其他さま〴〵の等級別を生ずるのである。例へば彼の虚榮名聞はほんの鼻の先の利巳主義一邊の競氣の作用、功名心覇氣などはやゝ遠大なる利巳的競氣の產む所、隨つて眼中常に他人あつて之れを排し之れを壓し若しくは凌駕せむとする邪念惡意が伴ふゆゑ兎もすれば則ち窮まり、或は弛み、或は驕り、竟には人個團躰を敵手としての競氣は勝を得れば消耗してしまふといふ弊がある。然るに彼の向上心（アスピレーション aspiration）即ち理想を追うて果てしなく前進し之れを圓滿に實現するまでは退轉せず休息せず倦まず弛まずして勉勵努力するの精神は、是れは決して妬心を容れない、聊も惡意を藏せぬ、偶々他の同志と共に同じ理想を追ふことがあつても「其の爭ひや君子なり」で決してそねみ怨むようなことはない。眼中に無形遠大の理想のみがあつて有形近小の個々人は無いからである。自分はかくの如き競氣をば偉人が三つの道具の一に否、其の中の最も大なる最も貴き利器と信ずるのである。蓋し、競氣あればそこに熱心が生じ熱心が生すればそこに勇氣忍耐などは求めざれとも湧き出づるのである。

ある。競氣は實に人間を活動せしむる所以の一大彈機であると稱すべきだ。大概の人傑は皆此の競氣の爲めに彈きだされたのだ。「德必ず隣あり」で競氣は毎に其の周圍に傳染して相刺激する。同級に英才の輩出し同時代に人傑のならび出づるなどは此の理によつて解釋せらるゝのである。

世に天然及び人爲の種々の障礙、防害、反對、抵抗、邪魔、逆境などいふものがないならば根氣忍耐などといふ消極的の德性ばかりでも自分の志望一通りを遂げることが出來ようが盤根錯節が行路難につきもとふ限りは、以上略說した三利器は是非とも身邊に携帶して、さて處世の途に上らねばならぬ。而もこれは只だはんの護身用の三つの道具まだ〳〵入用な品がいろ〳〵あるが、それは又別の日に話しませう。

昔の道徳と今の日本

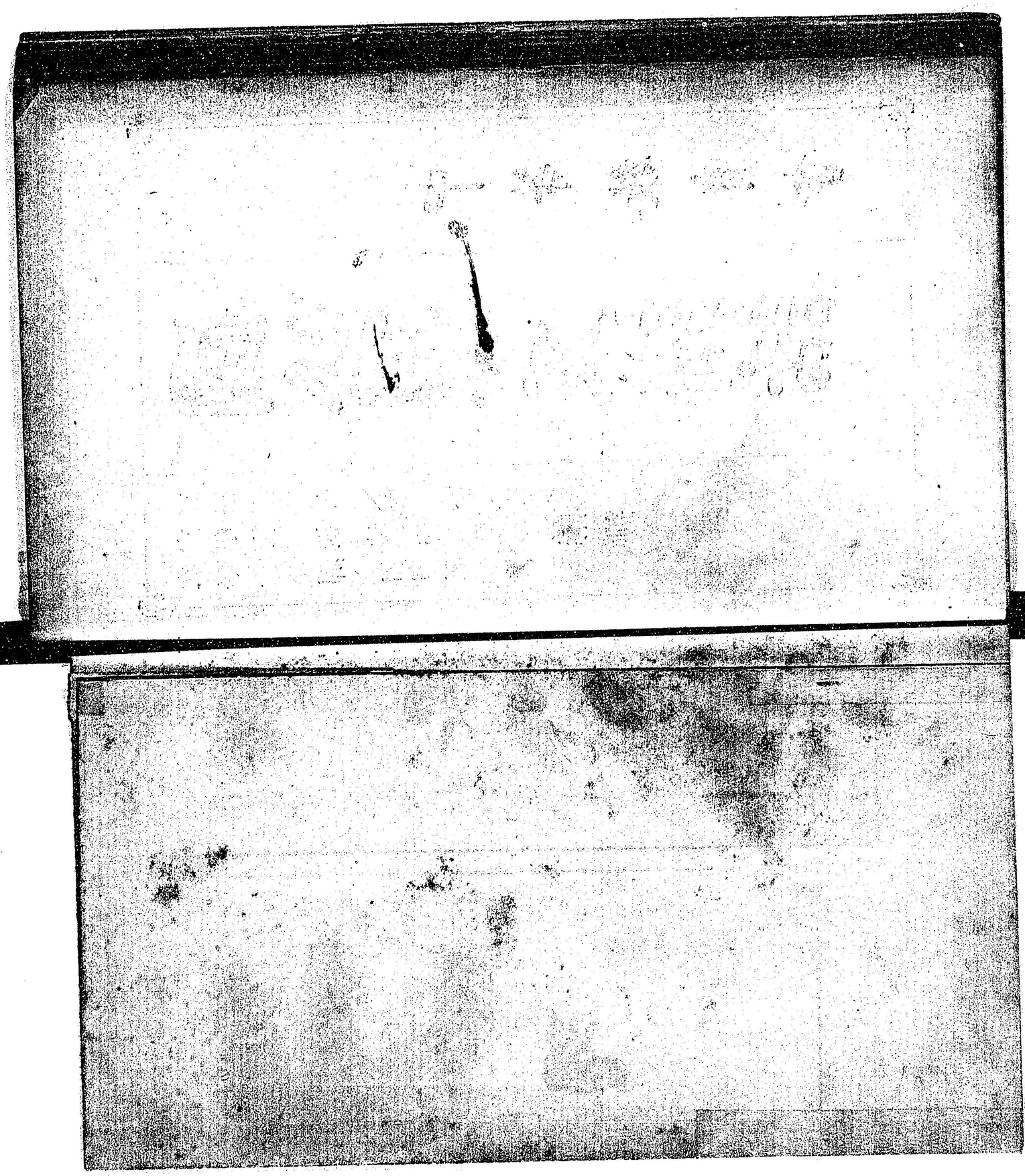
つい此の頃までは西洋の學問をさへ採用すれば、道徳とか何かは構はぬと云ふやうな人々が多く、第一人間は位置を造らなければならぬと云つて、榲要なる位置に就かうと云ふことを第一に心懸け、又た金がなければ何も出來ぬからと云つて、金を儲けることばかり工風して居る、所謂、利已的主義でございました。また金を儲けるのに何の爲めであるかと云ふに、無論、遊び戯れて愉快を極める爲めでございますから、快樂主義も出來て來るのであります。西洋の學問も斯う云ふ這入り方であれば、日本は滅茶々々に壞されて仕舞ふ、と此のように、昔の正しい考を持つて居る人々は思つた。どうしても日本に行はれた武士道を骨子として往かなければならぬ、と申したところで、昔の道徳を其のまゝ採つて來ても日本の現今の社會に應用出來ませぬ。知識の方面から見るとすつと劣つて居りますから、迚も昔のようには出來ないのでございます。それならばどう云ふ風にしたならば宜からう……？

（リギョール氏著『學界の偉人』）

國語漢文講話

文學士 岡田正美 講述
文學士 横地清次郎
文學士 久保得二

中等教育會



御製

あまてらす
やまかはも清く
なかれ[illegible]世かな
伊勢乃大神

皇后宮御歌

か[illegible]
[illegible]かはらぬ
[illegible]やはらく
[illegible]ゆきまさる
[illegible]つくし

東京正則中學校

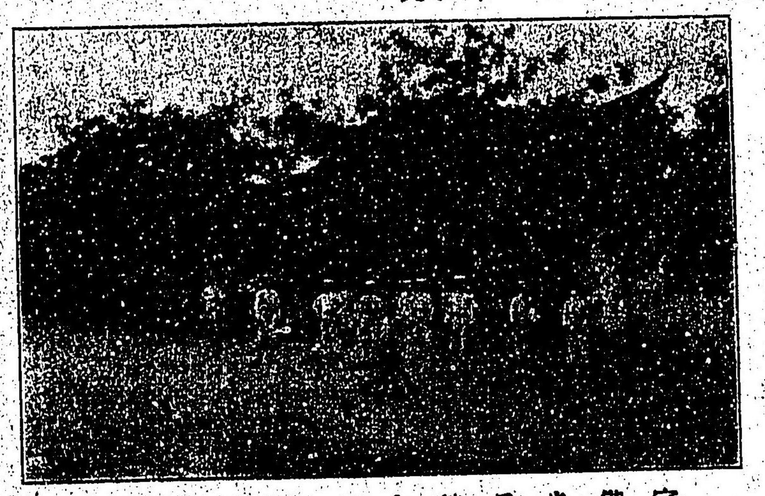
（千葉土井利國氏寄贈）

愛知縣第二中學校

（會員內藤郁藏氏寄贈）

臺灣風景

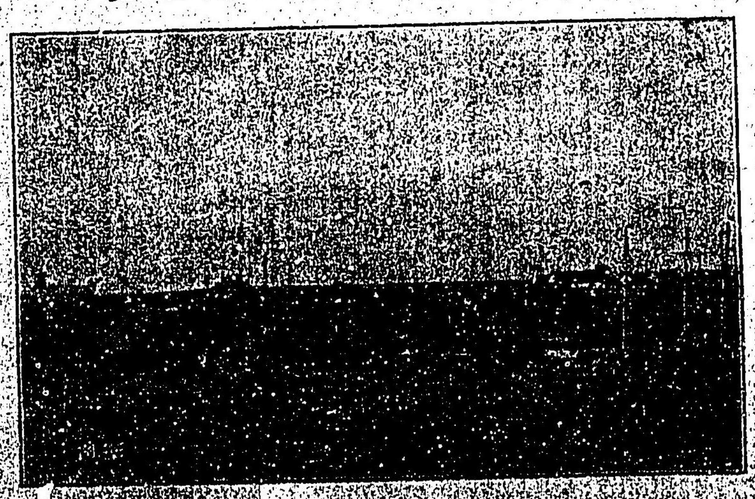
臺南俱樂部



第十一大隊警備步兵隊射擊

基隆山九五高分近眺

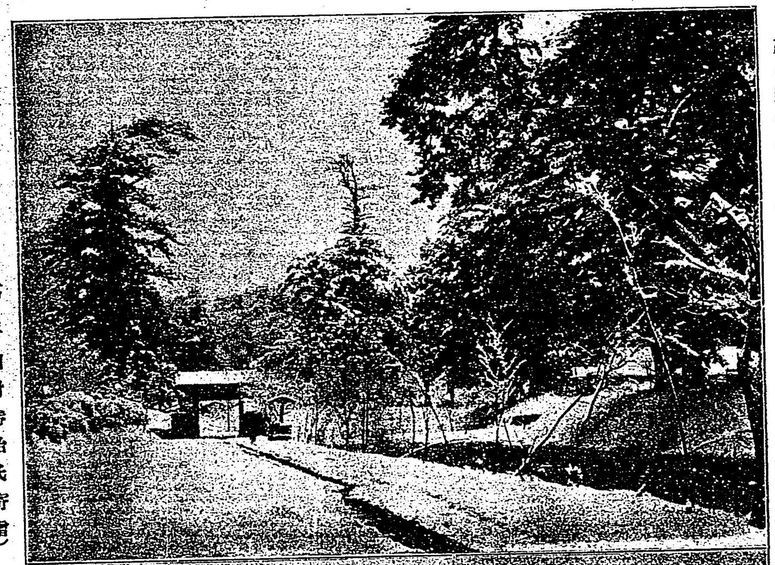
小川一眞製



（會員　在台灣竹村嘉雄氏寄贈）

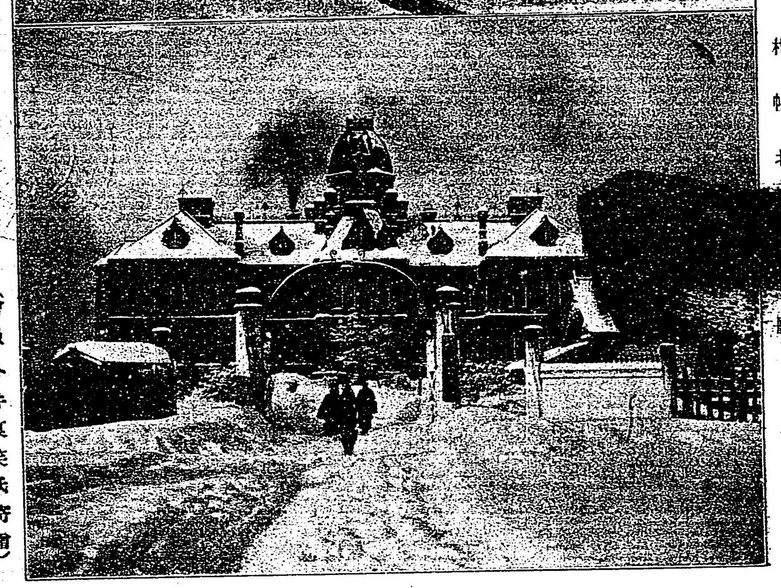
基隆附近及島嶼之一部

雪百種
（其の三）



福島縣相馬中村古城大手門

（會員田村勝治氏寄贈）



札幌北郊

（會員今井良笑氏寄贈）

國語漢文

國語漢文に對する批評

文學士 岡田正美

（石山）諸君、僕は、僕等のやる學課の内で、凡そ國語と漢文位馬鹿げたものはなからうと思ふが、諸君はどう思ふかネ。

（呂本）ウム、僕は同感だ。實に馬鹿げて居るヨ。當世不通の漢文だの、老人の寢言などで、此の貴重な歳月を費やすのは、本統に馬鹿げきつて居るヨ。

（八田）然り〳〵、僕も同感だ。平群君、千野君、一寸こつちを向き玉へ。此の間の返報に一矢を進上するから。ネー、十六夜日記だのサ、土佐日記だのつてサ、あんなものを吾々が讀んで、何の益になるかネ。實に馬鹿げて居るぢやーないか。近頃文部省で教科要目といふものを出して、土佐日記の樣な古くさいものは、凡て讀ませない事にしたそうだネ。夫れで、國文の先生達は大に反對だそうだから、定めて平群君も夫れには反對だらうが、我々から見ると、それは無論あたりまへの事だらうと思ふネ。それから、

（呂本）謹聽々々。

（八田）マー默つて居たまへ。それから、時世遲れの經濟談だの、忠だの孝だの、士大夫だのつていふ、時勢おくれの倫理の講釋などを、時々講讀なければならないことがあるが、あれも實に馬鹿げて居てたまつたものぢやーないネ。殊に、前の分と後の分と說が撞着して居るなどは誠に滑稽だヨ。そりやー、隨分中にはいゝこともあるサ。新井白石の幼時の話などは、大に我々を奮起させるサ。させる事はさせるけれども、あれ丈けなら、ちよつと話をして貰つてもすむことだらうぢやーないか。何も三時間も四時間も費やす必要はなからう。ネー。それから、千野君漢文もさ、

（呂本）や、今度は僕に言はせたまへ。千野君は御家が漢學家だから、千野君の漢學を熱心にやられるのは、決してかれこれいふべきぢやない。が、吾々此の將來、工學士だの、法學士だの、乃至陸軍士官だのにならうといふものが、あんなものをやつたつて、何の益があるだらうかだネ。夫れも例へば、英語英文のごとくサ讀んだり書いたりすれば、それで、支那人なら支那人が此方の意を

理解し、又、我々が彼方の意をも理解することが出來るといふのならば、それは隨分やり甲斐がないでもなからうサ。所が、所謂漢文は支那でも既に古文で、彼地に於てさへ、古文學者でなければ今は讀める者も書ける者もないそうぢやないか。そんな不通なものの、所謂デッドランゲエージを貴重な時間を費やして學ばうといふのは、實に本統に愚の至りぢやないか。烏山英語博士ばゞ何と思ひ給ふかネ。

（烏山）僕は漢文や國語の方は少々不熱心だから、利害も餘りよくはわかつて居ないが、それに對する批評もいくらかもすればそれに對する難があるだらうと思ふ。例へば、英語辭典に於ては、デッド、ランゲエージにはその印がしてあつて、成るべくつかはないようにしてある。それによつて見ても、リヴィング、ランゲエージを學ぶことの方が大切で、デッド、ランゲエージを學ぶことは、その道の專門家にならうとするものの外には一切不用だらうと思ふ。此の上に於て僕は國

語も漢文も興味を生じないので。勿論學校で正課になつて居る以上は、必ず、相當のヴァリユーがあるにはあらうが、僕一個としてはツルー、ヴァリユーがないだらうとおもふから、自然、その方に興味を持たないのだらう。

（石山）鳥山君のデッド、ランゲエージとリヴィング、ランゲエージとの論は、確に定論だとおもふ。根岸先生は、漢文を十分に修めると第一に文字が自由に使へるようになる、第二に名文章を作ることが出來るようになる、第三には古の聖人賢人と座を同じうして談笑することが出來るようになると、常に言はれるし、米山先生は國文國歌は我が祖先の言語歌謠で、從つて我が國民の眞情即ち所謂大和魂を述べたものであるから、我々は祖先の言語歌謠を十分研究し、又、我が國民の眞情即ち所謂大和魂を所得せねばならぬと言はれる。いづれもそれはさうであらう。さうではあらうが、さて、僕の疑ふ所は、文字を自由に使ふことの出來るといふことが、吾々に取りて幾何の利益になるか、名文章を作るといふ事が我々に取りて幾何の利益になるか、古の聖人賢人と談笑した所で、夫れが吾々に幾何の利益になるか、又、吾々は何故に我々の

祖先の言語歌謠を研究しなければならないか、我が國の所謂大和魂は國文國歌を研究しなければ、どうしても得ることが出來まいか。此處の處は僕が大に疑ふ處で。それは、無論、何もかもやることにした事はないけれども、他にいろ〳〵やらなければならない事をひかへて居る吾々が、今に於て、そんな事をやつて居るのは大いに馬鹿げて居ると信ずるのだ。

（呂本）實際さうサ。根岸先生の論などは、マーマーせいぜい十九世紀の論だネ。二十マー十七八世紀の吾々時代に於ては、字を知らむと欲すれば字引あり、文章を作らむとすれば熟語字典、文語良材、文章作法、雅言類纂等なんでもかんでもお好み次第にあり、古聖人賢人と語らむとすれば、夫々便宜の書數多あり、で、凡て吾が意のまゝにゆく。何も七面倒くさいかへ、よみの文や、かびのはへた樣な文章などを講讀せずともいゝにきまつて居るサ。要するにダネ、要するに國語漢文を中學校でやるのは十九世紀の事で、もう廿世紀になつた今日はすつかり廢してしまふのが當然なのだ。それを依然やつて居るなどは實に馬鹿げきつてゐるのサ。千野君

國語漢文　國語漢文に對する批評

や平群君は特別として、吾々廿世紀の男子は、到底、あんな馬鹿げたものをや
つて居る勇氣はないネ。
オイ西川。いやに今日はだまつて居るぢやないか。君も、ちつと論じ給へ
ナ。
(西川) ちつと論じよ。何と論じようかネ。
(呂本) 何と論じようもないものだ。君も、我が黨の士ぢやないか。無論僕等と同
感だらう。
(西川) 所が同感でないから不思議だネ。
(呂本) 何に同感でない。
(石山) これはけしからんネ。
(西川) 僕は國語漢文ほど吾々に取つて貴重有益なものはなからうと思ふネ。
(呂本) オイ〳〵、西川何をいふんだ。しつかりしろヨ。
(西川) しつかりして居るヨ。
(石山) オイ、君は何をいつて居るんだネ。國語漢文程馬鹿げた者はない、君も無論

同感だらうといふんだゼ。數學の話などぢやーないのヨ。
(西川) さうサ。國語漢文の話サ。國語漢文程吾々に取つて貴重有益なものはな
いと僕はいふのサ。
(八田) これはまた、いつもの西川君とは違ふネ。今日に限つて、國語漢文の肩を持
つといふのは頗るあやしいネ。何か米山先生、根岸先生、乃至平群君から御
恩でも蒙つたつていふような事があるんだネ。
(西川) 馬鹿な。そんなことが。
(石山) そんなら、何か理由があるのか。
(西川) 勿論、大ありサ。
(呂本石山) その理由は。
(西川) その理由か。その理由はネ。君考へて見たまへ。吾々は連日朝八時より
登校してサ、或は代數にて考を勞し、或は幾何にて頭を惱まし、或は英語、或は
化學或は体操で以て精神を疲らし身體を疲らすを實に夥しい者ぢやない
か、即ち吾々の心身は物質的苦難を受ける事實に非常なものであるのだ。

此の時に當たり、吾々、もし興趣滿々たる文學的作物によりて、此の苦難の世界をのがれて、華胥の國にでも遊ばせて貰はなくては、吾々の心身は、とても〳〵堪へられるものではない。だから、吾々に二十分なり三十分なり、ひるねの時間を與へてくれる此の國語漢文の時間は實に、吾々に取つて貴重有益なものであるといふのだ。

（呂本）なんだ、人を馬鹿にした。

（八田）イヤ、大抵そんな事だらうと思つたが、果たしてさうだつた。

（鳥山）今日は堀君が居ないので、國語漢文排斥論者が大多數を占めて居るので、誠に平群君と千野君とにはお氣の毒だナ。平群君も千野君もおとなしいからいけない。どうです、一つ大に論者を馭しては。

（平群）イヤ、僕の如き淺學のものが彼れ是れいつた所で何にもなりませんから、マー諸君の御說は諸君に御預けして置きませう。

（千野）十七八世紀のものの後繼者の論は、やはり十八九世紀のものゝ論で、迚も廿世紀の、諸君の贊成は得られないから、言ひますまい。

（鳥山）夫れは餘り意氣地がなさ過ぎるぢやーありませんか。大に論じたら、どうです。僕も多少御手傳してもいゝが。

（平群）イエ、何にまけるが勝ちといふこともあるから、マーまけておきます。

＊　＊　＊

（呂本）オイ西川君、此の頃の氣候は何の候といつたらいゝだらうか、どうだらう。首夏の候といふ樣なことをいつてもいゝだらう。

（西川）さうだネー。いゝだらう。併し首夏の候、あまり聞かんネ。八田君どうだらう。

（八田）何かネ。

（西川）此の頃のことは首夏の候といつていゝだらうネ。

（八田）首夏の候、さうだネ、ちと變だネ。どうもわからんネ。一體、そんなことをどうするのだネ。

（呂本）今一寸手紙を書くに必要なのだヨ。何といつたらいゝだらうネ。

（八田）それは呂本君にも似合はんことをいふぢやないか。呂本君の平生の說ち

や、そんなことはどうでもいゝのぢやないか。

(呂本) 所が是れはさういかんヨ。岡山に居るいとこが死んだといふ知らせが來たので、そのくやみの手紙を叔父の處へ出さうといふのだもの。少しまじめに書かなくちやーいけないのだヨ。

(西川) それなら仕方がない、千野君に聞くサ。

(呂本) 千野君にか。千野君には、どうもちときゝにくいヨ。

(西川) それぢや平群君に聞くサ。

(呂本) 平群君にもちといけないヨ。

(西川) それなら仕方がない、堀君が歸つて來るのを待つて聞くサ。

(呂本) さうだネ、さうしよう。

(呂本) オイ、西川君。

(西川) なんだネ。

(呂本) くやみの手紙に「御一同樣益〻御機嫌よく」なんて書いていゝだらうかネ。

(西川) さうだネ、よからうぢやないか。死んだ人は御機嫌がわるかつたのだけれ

どもあとの人は皆御機嫌がいゝのだらうから、さう書いても差支はなからうとおもふネ。どうだらう、八田君。

(八田) 又かネ。僕には今、明日の問題をやつて居るのだからどうか君、あの例の作文の本に相談してサ、僕は少し赦してくれ給へヨ。

(呂本) そんなに君、無慈悲なことを言はんで、少し助けてくれ給へナ。僕の名譽に關することなのだからサ。

(八田) どうもよわるネ。それぢやマー考へて見るヨ。君はマーその先を書いて居たまへ。

(呂本) 西川君。

(西川) 又かエ。僕も、もう御免だヨ。僕にやわからんヨ。

(呂本) マー、さう情ない事を言はんで丈でも聞いてくれ給へナ。君にまでさう言はれちや、全く仕方がなからうぢやないか。ネ君。りようようのりようの字はどうかいたつけネ。

(西川) りようようつて、りようちのことかネ。それなら病だれに大の字を書いて、

（呂本）病だれつて、何だエ。

（西川）病だれつていふのは、なにさ、ぼつを打つて、一をかいて、ノの字をかいて、ちよん〳〵を二つやつたそら、病氣の病の字の上の部サ。

（呂本）ウム、これか。

（西川）さうだ。其の下にかう大の字を書いて、ちよん〳〵をやつて曰をかいて、小をかいたのだ。

（呂本）ウム、わかつた。夫れから、も一つ、御しゆうしようといふしゆうの字はどうだつたね。

（西川）しゆうは秋の下に心をかくのだ。

（呂本）ウム、さう〳〵。それから、しようは、人扁に教場の場の字のつくりだつたネ。それから、もう一つ。御くやみのくやみはとうだつたネ。

（西川）サー、くやみト、一寸忘れたヂ。堀君の机の上に在るいろは辭典を見たまへ。

（石山）「おでそかに固らに」「固らに」とは何だらうヂ、鳥山君。

（鳥山）「固らに」。「固らに」と讀むのは變だヂ。かたまらに、かたらに、どうも變だネ。

あとで平群君に聞くべしだネ。

（石山）「君臣の秩序は井然として、なにれしことなし」だらう。文の字の下に糸を書いたのは何といふ字だネ。

（鳥山）文の字の下に糸。

（石山）アー、文。

（鳥山）作文の文の字か。それは紊みだれだ。

さうだ。みだれだ。「君臣の秩序は井然」なんだ井然ぢやないか井然だなんて、是れは音はせいだヨ、い然なんといふものだから、僕は「依然」かと思つた。

「君臣の秩序は井然として紊れしことなし」だ。

（石山）「萬古不易なるものになむある」なんて、これだから僕は國文はいやになるヨ。「前古不易なるなり」で澤山ぢやないか。

（鳥山）とれ見せ給へ。「萬古不易」「萬古不易」なんて、是れだから、君は此の間の樣に注意なんかくふのだヨ。少し、君、注意したまへヨ。いくら君、工科をやるのには國語や漢文はいらないといつたつて、凡てが皆萬世不易流でゆくものぢや

ないよ。少し注意してやり給へヨ。

* * *

是れはこれ某中學校の寄宿舍に於けりし學生の談話なり。國語漢文を修むる學生の爲めには、多少參考になるべきふしもこもりたりと聞きされば、此處にうつして閱讀に供ふ。呂本といふ學生の叔父に送りたる、手紙石山といふ學生の敎場に於ける講讀ぶり、見まはしきものなり、聞かまはしきものなり。

*

國語漢文

英語の讀方漢語の讀方

文學士 岡田正美

諸君、understand をオンデルスタンドと發音し、American をメリケンと發音し、nag をヘス、ヘブと發音し、upper, upturn をオッペル、オップトルンと發音するものが今あらば諸君はそれを聞いて如何に感するであらうか。それが西洋人の口から出るのならばいざ知らず、もし日本人の口から出るのであるならば諸君は必ず笑ひ且つ嘲るであらう。しかしながら諸君、考へ一考して見給へ。諸君はそれを笑ふ權利を持つて居るか、如何なる權利を持つて居て諸君はそれを笑ふか。三十年、僅に三十年前に遡つて見給へ、英語を學ぶものは殆んど皆オンデルスタンド流であつたのだ。その後英米の人々が追々多く渡つて來て、茲に從來のオンデルスタンド流しい英語を聞きもし學びもする樣になつて來だしたので、我が國人も追々正の讀方を變則讀といひ新しい正しい讀方を正則讀といふ樣になつたのだ。諸君の如きは大抵皆初めからこの正則の讀方を學んで居るのであるが、諸君の嚴父君

又は嚴父君と同年輩の人々は皆變則でやつたのだ。それで諸君が變則讀を聞て笑ふのは唯だその變則の標準と正則の標準とが少し違つて居て變則讀の音が正則讀の耳には少し變に聞こえるから、それで笑ふので實は笑ふだけの權利を持つて居るのではないのだ。もし諸君が變則の讀方を笑ふ權利を持つて居るといふなら、變則讀をする人の方でも、確かに諸君の正則の讀方を笑ふ權利を持つて居る筈だ。つまり笑ふ位置に立つのも全く自分が標準にして居るものが、その時代に於て多數の人々に尊崇せられて居るか、せられて居ぬかといふことに依つて定まるのだ。例を以ていへば、均しく正則の發音の内でも、ナツタルの發音とウエブスターのとは餘程違ふ處がある。又ウエブスターのとチエムバーのとも違ふ處がある。又場所に就いていへば英國と亞米利加とは餘程違ふ。又同じ英國内でもロンドンとエデインバラとは餘程違ふ處がある。又同じ米國でもニユーヨーク、ワシントン、サンフランシスコ皆それ〳〵違ふ、殊にカナダ地方は非常に違つて居る。此等は互の間に於ては、かようにお互に餘程違つて居る處があるが、現今我が國では、此等の内のいづれを標準とするとも定めて居ないから、どれも皆

標準になる資格がある。即ちどれもこれも皆正則の發音として尊崇せられて居るので裏向はどれが笑ふ權利を持つて居り、どれが笑はるゝ位置に立つて居るといふことはないのだ。これに依つて見ても、人の正しいとし、いゝとするのは全くその時代の人々が取る標準の如何に依るものであるといふことがわかるであらう。

漢語に於ても亦その通りだ。漢語には離れも知つて居る通り漢音、呉音、唐音の三つがあつて、所謂漢文の書物は大抵漢音で讀み、佛書は大抵呉音で讀む、といふ定めになつて居る。だから、もし呉音を交へて漢文書を讀み、又は漢音で佛書を讀むのがあつたら、我々は大いにこれを笑つていゝわけである。併し中には呉音に漢音を交へ、漢音に呉音を交へて讀む例なのもあるから、猥に一を以て他をいふわけにはいかぬ。呉音漢音はまづとかくもとして伊夫衣は音イで爲位委員は音キイインだ。又加可角はカカクで花火畫額はクワクワクワンだ。又自事寺祝はジジで治持除女はヂヂョだ。それだから、もし我々が伊藤をキトウ委員をイインカイで明治をメイジ觀花をカンカなどと書いたならば、我々は漢文の先生に

大いに笑はれ、又、大いに叱られたであらう。然るに、現今、小學校にては、明治をメイヂと書かうが、メイヂと書かうが、火事をカジと書かうがカヂと書かうが、それらは少しも笑はない、少しもとがめない。間違つたことをしてゐるのをなぜとがめないか、なぜ笑はないか、といふに、これは一昨年發布になつた文部省の小學校令施行規則中に於てちやんと許されたからだ。即ち從來ワの如きは區別しても區別せんでもどうでも可いと許されたからだ。即ち從來ならば、倒衣等はイとかき、位爲員等はキヰンとかき、加可等はカとかき、火花等はクワとかき、自事等はジ、治持等はヂと書くのが標準であつたのが、それがどちらも標準となつたからなのだ。是れに依つて見ても時と處とに依つて、標準の取り方で、笑ふ位置にも立ち、笑はれる位置にも立つものであることがわからう。

今例を擧げて、左に少しくいはう。

種　種類の種、種々の種は普通にはシュと讀むが、實は主勇ノ切でショウだ。種類はジョウルヰ、種々はショウショウといふべきであるのだ。

奥　奥飯、奥煙などつかふ奥で普通にキツといふ。しかし、これも實は去聲ノ切でケキだ。即ち、奥飯はケキハン、奥煙はケキエンといはねばならぬのだ。

充　廣韻ニ昌終ノ切、倭音シウ、清テ讀ムベキヲ古來濁テ讀習ハセルハ誤ナリ、然レモ今改ガタシ。（和讀要領）

兪　倭音ユト讀ムハ本音ナリ、（中略）又、輸ノ音アリ、倭音シュト讀ム（下略）（和讀要領）

輸　廣韻ニ式朱ノ切、倭音シュ、孟子ノ公輸子ヲ俗儒ユト讀ム者アリ、字体ニ因テ誤レルナリ、佛書ニ耶輸多羅女アリ、釋氏ノ徒シュト讀ム（和讀要領）

運輸課をウンシュクワ、輸出輸入をシュシュツシュニウといつて、わかる者は幾人あらう。

推　推敲推敵ノ推、手ニテ擠ス類ハ仄ノ韻ニ入ル、廣韻ニ他回ノ切、倭音スイナリ、スイト讀ムベカラズ（下略）（和讀要領）

文章の文句を鍛錬することを普通にスイコウするといふがスイコウでは誤で、タイコウといはなければならぬ。タイコウといつたら幾人わかるだらうか。

輔　廣韻ニ扶雨ノ切、父腐釜ト同音、倭音フナルペキヲ古來ホト讀習ハセリ、今改メガタシ、唯我朝ノ八省ノ大輔少輔ハ古來フト讀習ハセリ（下略）（和讀要領）

否　可否ノ否、倭語ニイナトイフハ有ノ韻ニ入ル、廣韻ニ方久ノ切、音缶、倭音フナリ、嚭否ノ否ハ補異ノ切、音鄙、否塞ノ否卦名ノ否ハ符鄙ノ切、音圮、皆紙ノ韻ニ入ル、華音ハ清濁ノ異アリ、倭音ハ皆ヒナリ、安否ヲ世俗ヒト讀ムハ誤ナリ、（和讀要領）

帥　可否をカフ、安否をアンプといつては普通にはとてもわかるまい。

畜　此字本入聲質ノ韻ニ入ル、倭音シユツ、論語ニ子帥以正トアル是ナリ、又去聲寘ノ韻ニ入ル、廣韻ニ所類ノ切、倭音スイ、將帥ナリ、我朝ノ官ニ太宰帥アリ、將帥ノ帥ナルヲ古來ソツト呼ブハ誤ナリ、（和讀要領）

牛馬羊犬豕雞ヲ六畜ト云フ字本獸ニ作ル宥ノ韻ニ入ル、廣韻ニ許宥ノ切、倭音キウ、六畜ヲ世俗チクト讀ムハ非ナリ。

又廣韻ニ許竹ノ切、倭音キク、養ト訓ズ、又丑六ノ切、畜止、儲畜ノ畜ナリ、周易ノ大畜小畜是ナリ、又蓄ニ作ル、畜産畜生ハ養ノ義ナルヲ釋氏ノ徒チクト讀ムハ誤ナリ、（和讀要領）

貯蓄ラチヨチクとよむのは今世間一般だから何でもないが、畜生をキクシヤウとよむなどはとても出來まい。

魄　落魄ノ魄、藥ノ韻ニ入ル、廣韻ニ他各ノ切、託橐梩ト同音、倭音タク、俗儒ハクト讀ムハ誤ナリ、或ハ毛ニ從ヘテ魂ニ作ル、魂魄ノ魄ト音義俱ニ異ナリ、（和讀要領）

普通に落魄とのみよみならはして居るから、今急にタクと改めようといふのは餘程苦しからう。

諸君試みに右の例に從つて、日々の新聞紙にあらはれて來る漢字漢語を悉く音を正しくして讀んで見たまへ。いかほどまで理解せられ、いかほどまで理解せられないだらうか

交　此の外ニ

遠方　遠波　金波　殘飯　看破　萬夫　賢父　軍法　八方　一派　葬殿

等ハエーンバキンバザンバンなどと皆下の字の頭の音を半濁音に發音して、エンハキンハザンハンなどと本音ハヒフヘホと發音するのを假に本音とするには發音しない。之れを本音のまゝに發音したならばどうだらう。却つて理解せられまい。

又、

文野　儉約　鑑輿　權輿　肝要　天運　云云　探幽　顔淵　天皇　觀音
天恩　鴛鴦　門院　安穩　寒温　親愛　閑話　簡易　眞意　因緣　三位
闕腋　陰陽師

等は所謂連聲で、

ブンニヤ　ケンニヤク　ランニヨ　ケンニヨ　カンネウ　テンヌン
ウンヌン　タンニウ　ガンネン　テンナウ　クワンノン　テンノン
エンナウ　モンニン　アンノン　カンノン　シンナイ　カンナ　カンニ
シンニ　インネン　サンミ　ケッテキ　オンミヤウジ

と讀む例なのだ。それで云云をウンウンといつては今でもやはりわからぬ。探幽もタンユウではわからぬ、觀音も天皇もクワンオンテンワウではわからぬ。三位闕腋もサムヰケツエキではわからぬ。しかし文野儉約鑑輿權輿肝要天運天恩門院寒温親愛閑話簡易眞意等ハブンニヤケンニヤクランニヨケンニヨカンネウテンヌンテンノンモンニンカンノンシンナイカンナカンニシンニなどといつてはとてもわからぬ。

又、夫子夫婦富貴等ハフウシフウフフウキと長音に讀んで、フシフフフキといはぬ。フシフフフキといつてはわからぬ。

又、四時詩歌至徳の類はシイジシイカシイトクと長音によむ例だ。しかし今はシジシカシトクといはなければわからぬ。

又管絃ハクワンゲンといふのが本音だが、詩歌管絃とつゞけていふときはシイカクワンゲンといふ例だ。しかしこれも今はシカクワンゲンといはなければわからぬ。

又禮記文選文章博士明法博士等はライキモンゼンモンジヤウハカセミヤウバウハカセといはなければ今でもやはり通じない。

學課としての朗讀法

文學美術が情育の一助たるは今更に辯を要せざるなり。演劇類似の遊戯にだ、明に此の用に叶ふべきものを適當に注意を加へて利用する時は害絶えて無くして、神益意外に多かるべきは、吾人も信じて疑はざるところなり。されど事の順序より言へばまづ文學的作物の審美的批判を以て、其の端を發かざるべからず例へば、作中に現るゝ人物の性格を剖析する事該人物の情操に同感同化することを有形にして表現する事即ち表情術等、此等の修練を先にする必要あり。此の素養を經ざる演劇は、單に拙劣なる醜戯たるにとゞまるべく、さなくば賤しむべき一種の模倣戯たるに終るべし。

吾人は我が國に眞成の朗讀術無きを憾むや久し、一面は上述の用を助げんがため、一面は廣く世の朗讀術に益せんがために、高等なる學校には朗讀課の設置せられんことを願望す。期讀術は其の必要件として、語學修辭學の智識を要し、且つ審美的鑑識を要す。其の情育美育に裨益する點より言へば素養なき處女演劇の効能に勝ること數等なるべし。朗讀術に關する大要は、嘗て『小羊漫吾』に掲げたる所に盡きたれば今こゝに繰返さず。

（井上博士著『文藝と教育』の一節）

國語漢文

英文の訓方、漢文の讀方

文學士　岡田正美

漢文を讀誦するに、正則の流義では、上より下へ直讀する。變則の流義でも、おぼつかないながらも、矢張上より下へ直讀する外は、古來全くない。尤も、上古から全くなかつたかどうであつたか、それはわからぬが、少なくとも、我々が知り得る處だけでは古來全くない。漢文の讀方は、諸君の實際やつて居る通り下より上に返つて讀む即ち、もし英文の讀方を訓讀と名つくべきものだ。

英文の訓讀に於ては、正則の流義では、つとめて一句一句、又は、一文一文で、意味をとるようにしてゆく、殊に坪内博士などの唱道せられるやり方では、一字一語の意義を悉しく解釋するよりも寧ろ成るべく、一句一文をそれに適當してゐる我が國語でいひかへるようにする。

諸君は既に先にもいつた通り、大抵正則の流義で英文を學んで居るのだから、

又、上下はジャウゲとはいふが、上等下等とはいはぬ。郵便物はイウビンブツとはいふが、ユウビンモツとはいはぬ。反物幅物はダンモノ、ブクモノとはいはぬ。

此の外に例は數多あるが皆略す。

さて是等に就いて、太宰春臺はその著和讀要領の内に、次ぎの樣にいつて居る。

「儒書ニハ漢音ヲ用ヒ佛書ニハ吳音ヲ用ヒ、其餘ハ吳漢兼用ニ讀ムコト古來ノ相傳ナレバ、是ニ從フベキコト勿論ナリ然レトモ、二音俱ニ中華ノ正音ニアラザレバ、混用スドモ何ノ不可ナルコトカアラン、必シモ是ニ拘泥スベカラズ況ンヤ俗間ニハ二音並行バルレバ、書ヲ讀ムモノ法ニ拘バリテ人ノ聽ヲ駭スベカラズ必ズ字音ヲ正サントシテ人ノ聽ヲ駭スハ風雅ノ道ニアラズ、既ニ是倭音ナリ、正ストモ竟ニ何ノ益カアラン、只耳ニカヽラズ聽ニクカラザル樣ニ書ヲバ讀ムベキナリ」

「問」ニハ例ニ違ヘル音アレドモ古來讀習ハセル音ヲバ改メザルヲ故實トス」

（此點は不可つけたのだ）

如何にも此の說の通りで殊更に耳立つような音によむのは、一方に大學者らしく見える利はあるが、又一方には普通のと違ふところから聞く者が理解しかねる損がある。又その上に當世標準になつて居る音は何といふ音であるかといふことを知らぬ迂濶者である腐れ字引であるといふ誹を受ける損もある。

それで予は英語の方に於ては我が國人が英米人と交はるに當たつてすぐさま必要であるから是非とも正しい發音即ち彼の國の人々の發音する樣な發音即ち正則の發音を十分に學習しなければならぬと思ふ。しかし漢語の方に於ては、だい日本國内で普通にわかればそれでいゝのであるから、遠ひて本音などをたいす必要はないたい何處までも我が國で現在行はるゝ標準の發音に注意してその發音に違はぬような發音を學んでゆくのが必要でおらう。本音だ正音だといつても現在普通の發音とちがふような發音はいくら本音でも正音でも何にも利益にはならぬ場合に依つては却つて不利益にならうとおもふ。だから予は英語の方はつとめて正則の讀方に從ひ漢語の方はつとめて當今の標準に從ふようにしなければならぬと斷言する。

學課としての朗讀法

文學美術が情育の一助たるは、今更に辯を要せざるなり。演劇類似の遊戯にだに、此の用に叶ふべきものを適當に注意を加へて利用する時は、害は絶えて無くして、裨益意外に多かるべきは、普人も信じて疑はざるところなり。されど事の順序より言へばまづ文學的作物の審美的批判を以て、其の端を發かざるべからず。例へば作中に現るゝ人物の性格を剖析する事、該人物の情操に同感同化すること、其の同感を有形にして表現する事即ち表情術等、此等の修練を先にする必要あり。此の素養なき演劇は單に拙劣なる醜戯たるにさへまるべきなくば、賤しむべき一種の模倣戯たるに終るべし。

吾人は我が國に眞成の朗讀術無きを憾めるや久し、一面は上述の用を期げんがため、一面は廣く世の朗讀術に益せんがためにや、高等なる學校には朗讀課の設置せられんことを願望す。朗讀術は其の必要件として語學修辭學の智識を要し、且つ審美的鑑識を要す。其の情育美育に、裨益する點より言へば素養なき臨時演劇の効能に勝ること數等なるべし。則讀術に關する大要は嘗て『小羊雜誌』に掲げたる所に盡きたれば今こゝに繰せず。

（坪内博士著文藝と教育の一節）

國語漢文

英文の訓方漢文の讀方

文學士 岡田正美

漢文を讀誦するに、正則の流義では、上より下へ直讀する。變則の流義でも、おほつかないながらも矢張上より下へ直讀する外は古來全くない。然るに漢文に於ては、此の直讀といふことは、僧侶が經文や梵唄を讀誦する外は古來全くない。尤も上古から全くなかつたかどうであつたか、それはわからぬが、少なくとも我々が知り得る處だけでは古來全くない。漢文の讀方は、諸君の實際やつて居る通り下より上に返つて讀む即ち、もし英文の讀方を誦讀と名つけるならば訓讀と名つくべきものだ。

英文の訓讀に於ては、正則の流義では、つとめて一句一句、又は、一文一文で、意味をとるようにしてゆく。殊に坪内博士などの唱道せられるやり方では、一字一語の意義を悉しく解釋するよりも寧ろ成るべく、一句一文をそれに適當してゐる我が國語でいひかへるようにする。

諸君は、既に先にもいつた通り、大抵正則の流義で英文を學んで居るのだから、

Good morning, How do you do ?

とらへば、すぐに「御早う御座います、御機嫌は如何で御座いますか」と理解し、

I will go to school to-morrow.

ときけば「明日學校に參りませう」と理解し、

It rains to-day.

ときけば「今日は雨がふる」ととくだらう。そして、

It has taken place.

とあれば「事が起つた」と解釋し、

Here a question arises.

とあれば、直に「茲に疑が生ずる」「茲に於て疑はしくなる」などと解釋するだらう。そして初學者でないものならば、大抵は、

in a long run.

を「長距離競爭に於て」などと解釋するやうな滑稽は演じまい。

處が所謂「疑則流義」では、「とてもかう直ぐには行かぬ。まづ、普通には、

グード、よき、モルニング、朝よ。ハウ、いかに、ユー、汝は、ヅー、爲し、ヅー、爲すか。

アイ、私は、トモルロー、明日、スクール、學校、ツー、にまで、ゴー、ゆく、ウヰル、であらう。

とやる。餘程熟達した者であつても、大抵は、

夫が今日雨降る。

夫が場所を取つた。

此處に一の疑問が高まる。

長き走に於て、

などと訓讀する。そして、この訓讀を土臺として、それから次ぎに、

御早う御座います、御機嫌は如何で居らつしやいますか。

明日學校へ參りませう。

今日雨が降る。

此處に於て疑はしくなる。

起こつた。

遂に。

國語漢文　英文の訓方及文の讀方

といふことに理解するのだ。即ちざつと二階段をふんでやう〳〵わかるのだ。

諸君の頭では「何故グードモーニング。御早う。ハウドゥー、ユー、ドゥー。御機嫌は如何です。とすぐに理解しないのだらう」と必ず怪むだらうが、さて此處が習性となつたといふものであらうか、實に不思議で、如何様な簡單な文句でも一度は必ず此の一字一字の訓讀即ち所謂直譯をやつて、それから次ぎに義譯に進んだので諸君が日々やつて居る如く、又坪内博士などの唱道せられる如く、一句一文の意義をすぐに取るといふことはどうしても出來なかつた様だ。それだから、少し長い文句に過はうものなら、それこそ大變、中々諸君がやる如く簡單にはとても〳〵行かなかつたのだ。一例を擧げていへば、

I thrice presented him the kingly crown which he thrice refused.

といふ文を訓讀するには、まづ、

ホイッチ、ものの、それは、ヒー、かれが、スライス三度、レフューズド、さらつた、ホイッチ

ところの、キングリー、王の、クラウン、冠を、アイ、私は、スライス、三度、ヒム、彼に、プレ

ゼンテッド、進めた。

とやつて、それから次ぎに、

彼が、三度、さらつた處の、王冠を、私は彼に、三度進めた。

と譯すのだ。變則流義では是が關の山で（正則流義でも、初學者は是れだけだが）諸君がやる如く、

私は彼の人に王冠を三度までも進めた。それをば彼の人は三度とも辭した。

とやうに簡單に、且つ明瞭に、且つ適當に、やることは到底出來なかつた。實に以前の變則流義を今の正則流義殊に坪内博士などの流義に比較して見たら、誠に月鼈雪壤の差があらう。

漢文の訓讀は、全くこの變則流の訓讀と同一軌のものだ。即ち所謂顚倒讀をするのだ。その顚倒讀には英文に變則流義と正則流義とがあると同様に、亦種々の流義がある。先づ最も普通で諸君も定めて聞き知つて居るだらうとおもふのが道春點後藤點一齊點だ。この點といふのは訓點といふことで、それはもと讀順や添へ言葉など即ち所謂返り點捨て假名等を書き入れる代に字の端や隅や中央などに朱點をうつたことがあるその點のことで後

たは返り點や捨て假名などが用ゐられるようになつて、その點をうつことは全く廢つてしまつたが、その名だけは殘つて返り點や捨假名などの總名となつたのだ。だから何々點又は何々訓點といふのは、即ちその流義の訓讀といふことなのだ。今左に諸種の訓點の例を擧げて、其の異同及び得失を示さう。

詩經の開卷第一の詩の

關關雎鳩在河之洲窈窕淑女君子好逑

を道春の訓點の本には、

關關雎鳩在河之洲窈窕淑女君子好逑。

と書いてある。これは、

「關々トヤハラグナケル、雎鳩ノミサゴハ、河ノ洲ニ在リ窈窕トシブカニタヲヤシキ、淑女ノヨキヲトメハ、君子ノマヘビトノ好逑ノヨキタグヒナリ」。

と讀ませるつもりなのだ。(日尾荊山ハ「關々トナキカハス、『君子ノアテビトノ』ヲ訓び方がいゝといつてゐる。)

隨分念入な訓方だ。これが山崎闇齋の訓點の本には

關關タル雎鳩ハ河ノ洲ニ在リ、窈窕タル淑女ハ君子ノ好逑。

とよんである。これが又佐藤一齋の訓點の本ニハ

關關タル雎鳩、河ノ洲ニ在、窈窕タル淑女、君子ノ好逑。

と讀んである。これは又餘り簡單すぎる樣に思はれる。終の二句の如きは、「窈窕タル淑女ト君子の好逑」との二つの名詞句が只だ列擧してあるだけで、何の關係もないようだとも惡口がいはれる。又、右の詩の次ぎの

參差荇菜左右流之窈窕淑女寤寐求之(下略)

といふ詩は道春點本ニハ

參差トカタタガヒナル荇菜ノアサヅサ(又ハ、ミヅナ)ハ、左右トヒダリニモミギニモ之レヲナガレノマヽニトルベシ、窈窕トシブカニタヲヤシキ、淑女ノヨキヲトメハ、寤寐トサメテモネテモ之ヲ求ムベシ。

と讀んである。是が闇齋點本ニハ

參差タル荇菜ハ左右之ヲ流ニス、窈窕タル淑女ハ寤寐之ヲ求ム。

とよんである。又、一齋點本ニハ

參差タル荇菜左右之ヲ流ス窈窕タル淑女寤寐之ヲ求ム。

とよんである。◎「左右流之」は「ヒダリニモ右ニモ之ヲ流ノマヽニトルベシ」とよめばよくわかるが「之ヲ流ニス」では何だかわからぬ「之ヲ流ス」では荇菜を川の流に流してやることになつて原意ニ叶はぬ。原意に叶はぬ樣な訓點は害あつて益なきものだ。又、

肅肅兎罝椓之丁丁赳赳武夫公侯干城、

の詩ハ道春點本ニハ

肅肅トトヽノヲレル兎罝ノウサギノアミヲ椓ツコ丁丁トクイウツコエアリ、赳赳トタケキ武夫ノマスラヲハ公侯ノキミノ干城トタテトシロトナリ。

と讀んである。是が闇齋點本には

肅肅タル兎ノ罝之ヲ椓ウツ丁丁タリ赳赳タル武夫公侯ノ干城。

一齋點本ニハ

肅肅タル兎罝之ヲ椓スル丁丁赳赳タル武夫公侯ノ干城。

とよんである。◎「赳赳タル武夫公侯ノ干城」は餘り亂暴であるが、◎「椓ツコ丁丁ト

クイウツコエアリ「武夫ノマスラヲハ公侯ノキミノ干城トタテトシロトナリ」。ハ餘リニ丁寧過ぎてくだ〳〵しくて、却つて聞く人を惑はす。又、

蒹葭蒼蒼白露爲霜所謂伊人在水一方、遡洄從之道阻且長遡游從之宛在水中央、

は、道春點本ニハ

蒹葭ノスヽキアシ蒼蒼トアヲシ、白露ノシロキツユ霜ト爲ル所謂ル伊人水ノ一方ノヒトツノカタニ在リ、遡洄トサカノボツテ從之シタガハントスレバ道阻且長シ、遡游トナガレノマヽニ從之シトスレバ宛トイナガラ水ノ中央ノナカニ在リ。

とよんであり闇齋點本には

蒹葭蒼蒼白露霜ト爲ル所謂伊ノ人水ノ一方ニ在リ、遡洄シテ之ニ從ントス道阻リテ且ツ長シ遡游シテ之ニ從ントス宛トシテ水ノ中央ニ在リ。

一齋點本ニハ

蒹葭蒼蒼白露霜ト爲ル所謂伊ノ人水ノ一方ニ在リ、遡洄シ之ニ從ヒ道阻リ且ツ長シ遡游シ之ニ從フ宛ト水ノ中央ニ在リ。

と訓んである。◎闇齋點の「遡洄シテ之ニ從ハントス道阻リテ且ツ長シ遡游シテ

之ニ從ハントス、苑トシテ水ノ中央ニ在リ」のトスは道春點のの如く「從ハントスレバ」とあるべきであらう、トスでは文が此處できれてしまふ。一齋點の「遡洄シ之ニ從フ」「遡游シ之ニ從フ」の「遡洄シ」「遡游シ」も隨分ひどいが「之ニ從フ」「之ニ從フ」は實に亂暴至極だ。これでは、とても「從ハントスレバ」の意はあらはせぬ。（餘事ではあるが、近頃東京の諸處の坂に「自轉車に乘り此坂路を下るべからず」と書いた木標が建てゝあるが、その「自轉車ニ乘リ」はわるい、これは必ず「乘リテ」としなければいけぬ。一齋流の弊を襲うて「乘リ」とやつたのでもあらうか。○道春點の「白露ノシロキツユ、」二方ノヒトツカタ」はくだ〳〵しい。

右に揭げた諸例に依つて見て、諸君は定めて、道春の訓方と英文の變則流の訓方とが非常によく似て居るのに驚くであらう。漢文と英文と、語はちがひ、昔と今と人はちがふが、やり方は皆同じことだ。

なほ、左に諸種の點例を示さう。

孟子の第一卷の

湯誓曰、時日害喪、予及女偕亡、民欲與之偕亡、雖有臺池鳥獸豈能獨樂哉。

の文を、道春點本には

湯誓ニ曰、時ノ日害喪（イツカホロビン）予女及（ト）偕ニ亡（ホロビン）ト云ヲ、民之レ與（ト）偕ニ亡（ホロビン）マク欲（セ）バ、臺池鳥獸有リト雖フ𪜈、豈ニ能ク獨リ樂シマン哉（ト）。

一齋點本ニハ

湯誓ニ曰、時ノ日害カ喪ヒン、予レ女チ及（ト）偕ニ亡（ホロビン）ト云ヲ、民之レ與（ト）偕ニ亡（ホロビン）マク欲（セ）バ、臺池鳥獸有ト雖フ𪜈、豈ニ能ク獨樂マン哉（ト）。

陽齋點本ニハ

湯誓ニ曰ク、時ノ日害喪（イツカ）ヒン、予レ女チ及（ト）偕ニ亡（ホロビン）ト、民之レ與（ト）偕ニ亡（ホロビン）マク欲（セ）バ、臺地鳥獸有リト雖フ𪜈、豈ニ能ク獨リ樂マン哉。

後藤點本ニハ

湯誓ニ曰ク時ノ日害喪（イツカホロビン）予女チ及（ト）偕ニ亡（ホロビン）ト、民之レ與（ト）偕ニ亡（ホロビン）ト欲（セ）バ、臺池鳥獸有リト雖フ𪜈、豈ニ能ク獨リ樂シマン哉（ト）。

衆山點本ニハ

湯誓ニ曰、時ノ日害喪（セン）予及女偕ニ亡（サント）、民與之偕ニ亡（サント）欲（セ）バ、臺

池鳥獸有リト雖豈能獨リ樂マン哉。

一齋點本ニハ

湯誓ニ曰、時ノ日害ヲ喪ヒシ、予女及儕亡ンヤト欲ル、臺池鳥獸有レ雖、豈能獨樂ン哉。

日尾點本ニハ

湯誓ニ曰ク、時日害喪、予女チ及儕ニ亡ビンヤト民之與儕ニ亡ヒマク欲セバ、臺池鳥獸有リト雖モ、豈ニ能ク獨リ樂シマン哉。

と訓んである。

道春點本ニ「亡ヒント云リ」とあるのは、上に「曰ク」といふ語のある場合に、下にそれを承けて「ト云ヘリ」といふ古の格を守つて居るので、是は甚だいゝ。開齋以下の諸訓點を始めとして、後世の人々は皆このいひ方を廢して簡單に「……ト」とのみいふやうになつたが、是では場合によりては不都合なことがある。對談の時又は丁寧な往復文などに於ては、今でも「……と申しました」などと常につかふ、又現今軍隊の通語では、上官に復命などをする時、その要件を談り終はつた時にはそこに「……終リ」といふいふ事から、又は引用した事が此處までだといふことを容易にくみとらせるには、かやうに「……」と云ヘリなどといふ方が、少し長たらしいけれども、餘程いゝ。予は諸君が此樣な場合には此樣な訓方をするのを切に望む。○同本の「亡ヒマク欲セバ」といふ訓は、たゞ少し時代の古い語遣ひなのみで、意義は大抵餘の人の訓の「亡ヒンコトヲ欲ス」「亡ヒント欲ス」と同じことであるから、餘りやかましくいふだけのことはないが是は、たゞ少し時代の古い語遣ひなのみで、意義は大抵餘の人の訓の「亡ヒンコトヲ欲ス」「亡ヒント欲ス」と同じことであるから、餘りやかましくいふだけのことはない。「亡ヒント欲セバ」の處は假定の意義をあらはして居なければならぬのだから、「欲セバ」となくてはならぬ。一齋點の「欲スル」は是亦亂暴極まる。○「有リト雖モ」此處も假定の處であるから「リトモ」とか「リトイフトモ」とかなくてはならぬ、一齋點の「有レ雖」は「アレドモ」で已然即ち已了に屬することになるから、これは全くいけぬ。日尾點の「ト雖モ」は「トイフトモ」と訓むつもりならばいゝが「イヘドモ」と訓むつもりならば同じく已了に屬することになるから、これもいけぬ。近來新聞などにはかやうな處を「アルモ」と書いてあるのが多くあるが、これはまづ〳〵いけぬ。此誤は諸君の作文にも往々ありはせぬかと疑ふ。よく注意してさやうな誤をせぬやう

にし給へ。○兼山點の「亡サン」は、所謂自他をとりちがへたもので、これでは自分が亡びるのではなく、自分が他の物を亡ぼすことになるからいけぬ。（自分が自分の身を亡ぼすのだから亡ボスでいゝといふものがあるならば、それは曲學者のこじつけだ）。又、

孟子見齊宣王曰所謂故國者非謂有喬木之謂也有世臣之謂也

の文を道春之本には

孟子齊ノ宣王ニ見テ曰所謂ル故國ハ喬木有ルノ謂ヲ謂フニ非ス世臣有ルノ謂ナリ

闇齋點本には

孟子齊ノ宣王ヲ見テ曰所謂故國者喬木有ル之謂ヒヲ謂ニ非ス世臣有ル之謂ヒ也

惕齋點本には

孟子齊ノ宣王ニ見テ曰ク所謂ル故國トハ喬木有ルノ謂ヲ謂フニ非ルナリ世臣有ルノ謂ヒナリ

後藤點本には

孟子齊ノ宣王ヲ見テ曰所謂ル故國ハ喬木有ル之謂ヲ謂ニ非也世臣有ル之謂也

兼山點本には

孟子齊宣王ニ見テ曰所謂故國ナル者ハ喬木有ル之謂也ヲ謂ヘルニ非世臣有ル之謂也

一齋點本には

孟子齊ノ宣王ヲ見曰所レ謂故國ト者喬木有之謂ヲ謂ニ非也世臣有ル之謂也

日尾點本には

孟子齊ノ宣王ヲ見テ曰ク、謂所ル故國ト者喬木有ル之ノ謂ヲ謂フニ非ス世臣有ル之ノ謂ト也

と訓んである。◎「見曰」は闇齋後藤、日尾等皆ミテ曰ク」と訓んで居るが此處は、とにかくに一方は王で孟子に對しては長上であるから尊敬の語を遣つて「ミテ」とするがいゝ、即ち道春兼山等の訓がいゝ。惕齋は「アフテ」と訓せるつもりと見える

が「ア」は同等のもの〻間にいふ語だから、處に適當せぬ。一齋は「ミイハタ」と訓んで居るこれは先にいつた通りいけぬ。○「所謂故國者」の訓は大に注意すべきものだ。道春、後藤は「イハユル故國トハ」と訓んで居る。闇齋も定めてさうよむつもりだらう。惕齋一齋荊山は「イハユル故國トハ」と訓んで居る。是は大にいゝ。「所謂」といふ語は「かの世間で故國故國といつて居るその故國といふものは」の心もちをそへる語であるからその意趣をあらはすには「故國トハ」とするのが一番いゝ。兼山點の「故國ナル者ハ」は極めてわるい。かやうな所に「ナル モノ」と遣つたことはこの頃より以前には我が國語には例のなかつたとでかやうに國語に例もないことを、國語をばよく知らぬ漢學者が遣ひ始め、それがだん〳〵書生社會―物識り社會―生意氣社會―ハイカラ社會に廣がつて遂に今日では、かような語を遣はぬものは舊弊家因陋家非文明家と見做される程にまでなつた。しかしこの語は用方が極めて不適當であるから、ハイカラ連は何といはうとも、予は斷じていけぬといふ。諸君もし穩當な國語を遣つて訓讀をしようといふ考があるなら、「ナル者」といふような語は決して遣ひ給ふな。是は殊に新進の諸君に向かつて切に注告する。さ

て、右の例に於て不思議なのは一齋が「故國ナル モノハ」と訓んで居ないことだ。

餘り例が多うすぎる樣であるが今一つ見せたい處があるから、敢て左に掲げる。

樂正子入見曰、君奚爲不見孟軻也、曰(中略)曰非所謂踰也貧富不同也、○樂正子見孟子曰、克告於君君爲來見也、嬖人有臧倉者沮君君是以不果來也、

の文を道春點本には

樂正子入テ見テ曰君奚爲ゾ孟軻ヲ見不ル、曰(中略)曰何ソヤ君ノ所謂ル踰ユトハ、前キニハ士ヲ以シ後ニハ大夫ヲ以シ、(中略)曰所謂ル踰ルニハ非貧富同カラ不レバナリ○樂正子孟子ニ見ヲ曰克君ニ告ス、君來リ見ルヿヲ爲嬖人臧倉ト云者有リ君ヲ沮ム君是ヲ以テ來ルヿヲ果サ不、

闇齋點本ニハ

樂正子入ヲ見ヘテ曰君奚ン爲ンゾ孟軻ヲ見不ル、曰(中略)曰何ソヤ君ノ所レ謂踰タルト者、前ニハ士ヲ以シ後ニハ大夫ヲ以シ、(中略)曰所レ謂踰タルニ非也貧富同カラ不レバ也○樂正子孟子ヲ見テ曰克君ニ告プス、君爲メニ來リ見ル嬖人臧

倉者有リ、君ヲ沮ム、是ヲ以來ラヌ果サ不也、

惕齋點本ニハ

樂正子入テ見エテ曰ク、君奚爲ンゾ孟軻ニ見ハ不ル、曰ク、(中略)曰ク、何ソヤ、君ノ所謂ル踰タリトハ、前ニ士ヲ以シ、後ニ大夫ヲ以シ、(中略)曰ク、所謂ル踰タルニ非ルナリ、貧富同カラ不レバナリ、○樂正子孟子ニ見エテ曰ク、克君ニ告ス、君爲ニ來リ見ハンコトヲ、嬖人臧倉ト云者有リ、君ヲ沮ム、君是ヲ以テ來ルコトノ果サ不、

後藤點本ニハ

樂正子入テ見エテ曰ク、君奚ン爲ゾ孟軻ヲ見不ル、曰ク、(中略)曰ク、何ンソヤ、君ノ所レ謂踰ユトキ者、前ニハ士ヲ以シ、後ニハ大夫ヲ以ス、(中略)曰ク、(中略)曰ク、所レ謂踰ルニ非ス貧富同カラ不レハ也、○樂正子孟子ヲ見テ曰ク克君ニ告フス、君爲メニ來リ見ル、嬖人臧倉ナル者有リ、君ヲ沮ム、君是ヲ以テ來ルコヲ果サ不、

兼山點本ニハ

樂正子入見シテ曰君奚爲ゾ孟軻也ヲ見不ル、曰、(中略)曰何ソ哉、君ノ所レ謂踰ルナル者ハ、前ニ士ヲ以シ、後ニ大夫ヲ以シ、(中略)曰、(中略)曰、所謂踰ルニハ非貧富同カラ不レハ也、○樂正子孟子ヲ見テ曰ク克君ニ告フス、君爲メニ來リ見ル、嬖人臧倉ナル者有リ、君ヲ沮ム、君是ヲ以テ來ルコヲ果サ不、

不レハ也、○樂正子孟子ニ見テ曰、克君ニ告ク、君來見セント爲リ、嬖人ニ臧倉ナル者有テ君ヲ沮ス、君是ヲ以來ルコヲ果サ不、

一齋點本ニハ

樂正子入リ見ヘ曰君奚孟軻ヲ見不ルヲ爲ス也、曰、(中略)曰何ニ哉、君所謂踰クトキ者、前士ヲ以シ、後大夫ヲ以シ、(中略)曰、(中略)曰所謂踰クニ非ル也、貧富同カラ不ル也、○樂正子孟子ヲ見、曰克君於告ク君爲メニ來リ見ル、嬖人ニ臧倉ナル者有、君ヲ沮ス君是ヲ以來ルヲ果サ不ル也、

日尾點本ニハ

樂正子入テ見エテ曰ク、君奚ン爲ゾ孟軻ヲ見不ル、曰ク、(中略)曰ク、何ソ哉、君ノ所謂踰ルトハ、大夫ヲ以シ、(中略)、曰、(中略)曰ク所謂踰ルニハ非ス、貧富同カラ不レハ也、○樂正子孟子ヲ見テ曰ク、克君ニ告ス、君爲ニ來リ見ンコトヲ、嬖人臧倉ト云者有テ君ヲ沮ム、君是ヲ以テ來ルコヲ果サ不、

と訓んである。○まづ此の諸例に於て注意すべきは、樂正子入テ見テ曰」を兼山の外は悉く「マミエテ」と尊敬の語を遣つて居ることである。樂正子は魯公の臣下であ

るから、是はさうあるべきだ。○次ぎに注意すべきは「突爲不見」を皆が尊敬の語を遣つて居ることだ。是は甚だわるい。はずして「見ザル」惕齋」ハ「アハザル」といふ語を遣つて居る上に「マミエテ」と敬語を遣つて居る以上は、下にも同じ格に「見給ハザル」といふような敬語を遣ふのが至當だ。現在漢文口調の文には一切敬語を省くのが例のようになつて居るが、既に我が國語を以て訓讀する以上は我が國語の法則に從つて、相當の語遣をもしなければならぬ。それをさうせぬときは、言葉は外國人か又は幼年者かなにかの片言となつてしまつて整つた正しい我國人の言葉ではなくなる。よく〳〵注意すべきものだ。次ぎに、所謂踰者ハ兼山一人「踰ルナルモノ」といふ語を遣つて居る而かもその兼山もその下の「所謂踰」の處には「ナル」を遣つて居らぬ。是は全く者にひかれて「ナル者」としたのであらう。いづれにても是はいけぬ。○次に「樂正子見孟子」を道春惕齋兼山は「マミエテ」と訓し他は「ミテ」と訓んが居る。是れは、樂正子は孟子の弟子であるのだから、尊敬の意を含めて「マミエテ」と訓む方がいゝ。兼山が「マミエテ」と訓んで居るのと日尾荊山が「ミテ」と訓んで居るのとは一寸妙だ。○「告」は「ツグ」と訓んだのは敬意が含まつてないからいけぬ。「マウス」と訓したのが適して居る。「君爲來見」來テアハウトシタ」といふ處だから「來り見ントセリ」としなければならぬ。「來リ見ントス」「來リアハントス」も十分ではない。「來り見ル」としては、前後の勢で、既に來て見たことになるから、それではいけぬ。道春の「來り見ルコトヲス」は文字に拘泥した、餘程苦しい、極めて無理な訓方だ、かような語は我々の口からは決して出ぬ。一齋の「孟軻ヲ見サルヲ爲スヤ」に至つては實に驚くの外なしだ。此樣な奇妙な語遣をする處が日本國内何處かにあるだらうか恐らくは、

「彼ハ惡事ヲ爲スベク餘リニ善人ナリキ」といふ語遣と共に、天下何處の隅にもかゝる語を遣ふ處はあるまい數字に拘泥するとはいへ餘りに愚なる訓方ではないか。○嬰人有臧倉者、予が先に諸君に見せ度い處があるといつたるは即ち此處だ。まづ訓讀で「嬰人」の下に「ニ」のあるとないとに注意して貰ひたい。道春惕齋荊山等國語に明るい人々のになくて、比較的に亂暴な兼山、一齋のには「ニ」がある。是は誠に不思議だ。さて、此「ニ」のあるとないとは幾何程の差異があるかといふに、それは讀文で「有」の字が「嬰人」の下ニ在ると上ニ在るとだけちがふ。即ち

嬰人有臧倉者　嬰人ニ臧倉ト云フ者アリ

有°斐人臧倉者　　斐人に°臧倉ト云フ者アリ」
　　斐人(の°)臧倉ト云フ者アリ」

前者に於ては、意は「斐人が數多居る中に、臧倉といふ者が居つて」となり、後者に於ては、「斐人臧倉といふ者が居つて」となる。道春、闇齋、惕齋、後藤、日尾等の訓方は後者「有°斐人臧倉者」の訓方では無い。一寸した微細なことの様ではあるが、注意すべきもので、決して忽諸に付すべきものでない。○次ぎに、殊に注意して見て貰ひたいのは、「臧倉者」の訓點だ。道春、惕齋、及び、日尾は、「臧倉ト°云°フ°モ°ノ」と訓し、後藤、兼山、一齋、は「臧倉ナル°モ°ノ」と訓んで居る。一体對手の未だ知らぬものを始めて話出す時には「何々といふもの」といふものが、是が我國語ばがりではない、英語でもそうだ。英語では is called とか whose name is とかいふ語が、必ず遣つてある。恐らく世界各國皆そうであらうと思ふ。現に漢文に於ても、かやうな處には必ず「者」又は「也者」といふ字が遣てあつて他の尋常の場合とは違つて居るそれで此處は必ず「臧倉ト°云°フ°者」といふべき處である。それを我が國語を知らぬものが、あながちに文字に拘泥

して不當な訓をつけたのだ。然るに、それが先にいつた通り非常な勢で、生意氣盛生連中に廣がつたので、今では普通の國語の樣になつて甚だしきは「ナルモノ」を遣はぬと文明開化の人間でないように思はれる位にまでなつて居る。誠に恐な極だ。諸君少しく語の本意を考へて、このやうな無稽な用方は成りたけしないようにし給へ。是れも殊に茲に注意して記して置く。「臧倉ト云フモノアリテ」とテの字があり たい。又「來リ見°ントス」「君ヲ沮ム」「果サズ」皆敬意が含めてない。漢文の例だから仕方がないといへばそれまでだが、成るべくならば「來リ見°給°ハントス」「君ヲ阻°ミ°奉°ル」「果°シ°給°ハ°ズ」とようにありたいとおもふ。

さて、又日尾荊山は一齋流の學者が「曰」の字を尊卑の區別もなし、凡てイハクと訓むのを駁して「訓點復古」の中に左の如くにいつて居る。

今ノ俗已ヨリ上位ノ人ノ云フヲバ仰セラルト云フ、一轉シテ、オッシャルナド云ニテモ知ルベシ、是等漢文ニ齊ケバ何レモ曰ノ字ナレバ皇國ノ詞知ラヌ本讀タヽバ一概ニイハクトバカリ覺テ居ル故、先哲ノ皆子ノタマハクト讀來リシヲ迂遠

ナ樣ニ必得テ子イハクト讀ムハ何事ゾヤ、孔子ノ御詞ヲモイハクト云ヒ、天子モサウ云ウタ庶人モサウイウタト、尊卑ノ分チモ知ラヌ、甚シキ僻事ニシテ、無禮ノ至リ也、云々

漢文を訓む人、漢文流の文を作る人も、多少は尊卑の區別を訓讀の上に行文の上にあらはすようにして貰ひたいものだ。

又荊山は「訓點復古」の內に

愼終追遠民德歸厚矣

を

終ヲ愼ミ遠ヲ追フ、民德厚キニ歸ス

と訓するをとがめて、これでは「終ヲ愼ミ、遠ヲ追ブ」と「民德厚キニ歸ス」との二文章に聞こえて本意が通じない。是非とも、

「終ヲ愼ミ遠ヲ追ヘバ民德厚ニ歸ス」

といふやうに「追ヘバ」といふか、又は「追フ時ハ」とかしなければならぬといつてゐる。

又、

事君盡禮人以爲諂也

を

君ニ事フルニ禮ヲ盡ス、人以テ諂フト爲ス

と訓むをとがめて、

君ニ來ヘマツルニ禮ヲ盡セハ人以テ諂フト爲ス

と訓まねばならぬといつて居る。誠に道理至極の說だ。

さて例が餘り多くなつたので、定めて諸君は厭がきたらうとおもふが、今より漢文訓讀の全體にわたる二三の說を傳へよう。

先の「關々トヤハラギナケル」の訓讀に就いて、太宰春臺は「和德要領」の內に左の如くいつて居る。

「倭讀ノ法ニ、毛詩文選等ニハ音訓兩讀ヲ用ルコトアリ、言訓兩讀トハ音ニテ讀テ又倭訓ニテ讀ムナリ、關々タル雎鳩ヲ、關々(クワンクワン)トヤハラギナク雎鳩(シヨキウ)ノミサゴト讀ミ、參差タク菜ヲ、參差(シン)トカタタガヒナル荇菜(カウサイ)ノアササト讀ム類ノ如キ是ナリ、此法何レノ時ヨリ始マレルトイフコトヲ知ラズ尤無益ノ事ナリ、是ヲ止テ只

常ノ如ク讀ムベシ。

睢鳩がミサゴであること、荇菜がアサザであること、乃至は淑女はヨキヲトメ君子はアテビト武夫はマスラヲ、公侯はキミ、干城はタテシロであることを知つて居るものには、かの如き訓方は、變則の英文訓讀方と同樣くだ〳〵しくて到底堪へられない。此の點に於ては、諸君も定めて春臺と同感であらう。

春臺は、又、和讀要領』に、

賈誼が過秦論に、雲集響應、景從の字あり、雲集は雲の集まるが如しといふ義なり、響應は響の聲に應するか如しといふ義なり、景は影と同し、景從は影の形に隨ふが如しといふ義なり、古來の讀に、雲の如くに集まり、響のごとくに應ず景のごとくに從ふと讀む、義は差はされども、詞むつかしくして誦讀に不便なり、只音にて雲集響應す、景從す、と讀むべし、凡文の中に此類の詞ある は、皆譬喩の詞なり、狼の願るか如くなるを狠願といひ、虎の物を視るが如くなるを虎視といひ、龍の驤騰するか如くなるを龍驤といひ、蜂の起るか如くなるを蜂起といひ、鼎の湯の沸くか如くなるを鼎沸といひ、麋の沸くか如くなるを

麋沸といふ例にて知るべし、凡此類皆譬喩の詞にて名目なり、故に音にて讀むにしくはなし、倭語に讀めは名目にならず、未明に臥蓐の上にて食するを蓐食といふ常の早飯を朝食といふ日中に食するを中食といふ、晩飯を夕食といふ、皆名目なり、蓐食をしとねにはむと讀み、朝食をあしたにくらふと讀み、夕食をゆふべにくらふと讀む類、皆名目を失て惡し、蓐食す朝食す中食す、夕食す、と音に讀むべし。

といつて居る。所謂名目とは名稱といふことだ「云々のことは何々と稱ふ」と定めた上は、名稱のまゝにいふがいゝ、くだいて「何をして何をすると」いふやうにいふのはいけぬ、との說だ。

で、春臺は一語一語に十分に意味を持たせて、そして、全体に於ては、成るべく簡單にあるように訓讀するのがいゝと主張する。それだから、かの「關々トヤハラキ」流のを排斥し、又、右の如く響應、蜂起等もその儘とは決して取るまい。それは『和讀要領』中に簡單にしようとはせぬ、「齋流のなどは

> 童蒙書ヲ讀ム時、倭語ノテニヲハニ於テハ全ク心ヲ用ヒズ、只時師ノ口授ニ從ヒ、國語漢文　英文の訓方漢文の讀方

テ習讀スル故ニ、多ク差謬ヲ致ス、凡倭語ハテニヲハヲ以テ其義ヲ成就スルヲハヲ誤レバ文理ニ違ヒテ、大義遂ニ乖ク、眞ニ是細故ニアラズ、サレバ今ノ學者若華音ノ讀ヲナサバ、テニヲハヲ論セズシテ可ナリ、倭語ノ讀ハテニヲハヲ用ヒサルコトヲ得ズ、深ク拘ハルニ足ラストイヘドモ、草々ニシテ鹵莽ヲ致スベカラズ。」

といつて居るのでよくわかる。春臺のいふ簡單とは、決して、亂暴に言句を省略してしまふのではない。

「倭語ハテニヲハヲ以テ辭ヲ屬ル、テニヲハトイフハ上下ノツナギナリ、サレバ、ヲトイフベキヲニトイヒ、ニトイフベキヲヲトイヘバ、義理易ル樣ナルコト、諸ノテニヲハ皆然ナリ、故ニ倭語ハ是ヲ緊要トス、倭讀ヲスル者ハコレヲ忽ニスヘカラズ、但其間ニ一種ムツカシキ詞アリ、云云セバトイヒテヨキヲ云云セマシカバトイヒ、云云セジトイヒテヨキヲ云云セザラマシトイヒ、イフベキノミトイヒテ、ヨキヲイフベカラクノミクノミトイヒ、云云ノミトイヒ、云云スル又ハ云云セリトイヒテヨキヲ、云云シケラシトイヒ云云

ナリトイヒテヨキヲ云云ナラントイフ、此等ノ詞、倭語ニテハ風雅ナルニ似タレドモ中華ノ書ヲ讀ムニ是ヲ用キテハ只ムツカシキノミニテ、學者ノ爲ニ少ノ益モナシ、必此類ノ詞ヲ除去テ、一切ニ簡易ニ從フベキナリ。

かくの如き簡易方を取るのだ。春臺及び一齋の説に反對する日尾荊山は之れに對して

春臺ノ云ル如ク簡單ニ讀バ眞率ニテ多樣ナレ共本文ト注意トヲ併セ、一篇ノ趣意ヲ能々考ヘ見レバ、先達ノ士、聖經賢傳ノ意味ノ深長ナルヲ得ト會得シテ期讀シメタルナリケリ、カヤウニ詞イキツマラズシテケタカク優美ナルヲ端座正心悠々然トシテ、朗誦セデハ、聖人ノ温潤賢者ノ恭莊ゲニ左モ有ベキゾト、我モ悟リ、人ヲモ感起スル程ノ妙ハ無ナリ」。

といつて居る。是れも至當の論だ。セジとセザラマシとは幾分かの違ひはありナリとナランとも幾何かの違はあるのだから、此等の相違から研究し始めて、その語に該當して居る意義を了得するまでに古人の意を研究したならば、それは實に申分なく十分であらう。事實がかくかくだから、此處にはイハクといつては不適

當だノタマハクといはねばならぬ實際がかく〳〵だから此處には事ヘルではいけぬ事ウマツルといはねばならぬとように微細な處まで氣がつく位深く注意して古人の書をよむならば、それは實に十分だ。聖賢の書は如何にもその位の度まで深く注意して讀むべきであらう。

道春、道春の師藤原惺窩及びそれより以前の先達又惕齋荊山等が我々が不用であらうと思ふ度以上の微細の點にまで注意して、場合場合に應して、それ〳〵差別をつけておいたのは半は聖賢の意を十分に了得して必要に應してさうしたのであらうから、我々は一概に無用のこと徒勞のことゝして排斥する事は無論出來ぬ。しかしながら、如何樣にいくら苦心してもどうしても仕方のないのは、彼我國語の違ふことで、彼の國語の特性を知り又我國語の特性を知れば知るほど彼の國語を以て巧にいひあらはしてある某の事がらは、なか〳〵容易に我國語にうつすことの出來ないといふことを發見するようになる。此處に於て如何かず、彼の文を我國語にうつすことはやめにして、文は彼國語のまゝにしておいて、我れは直ちに古人の精神をば十分に了得せび

との考が起こるようになる。太宰春臺は實に此の考を以て子弟を導いたやうだ即ち一方に於ては、或る度まで國語法に遵ふべきことを誡めると同時に、一方に於ては返り讀即ち顚倒讀を排斥して、上より下に直讀することを主張した。「和讀要領」中に、大いに此の事を說いて居る。今その二三節を引いて示せば、

今吾國ノ人、中華ノ書ヲ以テ此方ノ語トシテ顚倒シテ讀ム、故ニ文義ヲ害スルコト多シ

今ノ學者幼ヨリ顚倒ノ讀ヲ習テ、華語ヲ解セサル故ニ、只カクノ如ク讀テ其義通ズトオモヒテ、倭讀ノ甚義理ヲ害スルコトヲ知ラズ、

不敢ト敢不トハ其義正ニ相反ス、然ルヲ倭讀ニハアヘテイフコトヲ必先ニイヒ故ニ、不敢ト敢不ト相亂ルコトアリ、不必必不モ亦然リ、

又上ニ在ル一字一句下ノ數字數句ニ被ラシムル處アリ、是ヲ顚倒ニ讀メハ必其義ヲ失フナリ、又決シテ顚倒ニ讀マサル故ニアラユル助字皆無用ノ字トナリテ、又倭讀ニハ助語辭ヲ捨テヽ讀マサル故ニアラユル助字皆無用ノ字トナリテ自然ニ華語ノ意味ヲ失フナリ、今ノ世ノ儒者多ク書ヲ讀ミ能ク經術ヲ談シテ

頗ル發明スル所アレドモ、古人ノ語ニ於テ靴ヲ隔テ痒ヲ搔ガ如クナルハ、倭語ノ習、頗倒ノ弊俱ニ痼疾トナリテ、其靈智ヲ昧ス故ナリ、口ニ談ズルスラ猶然ナリ、況ヤ文章ヲ作ルニ至テ、倭語ノ習除カザレハ、必字義ヲ誤リ、顛倒ノ弊去ラサレバ、必文理ニ違フナリ、著述多シトイヘドモ、用ヲ濟サス勞シテ功ナシ、是日本ノ學者ノ大患ナリ。

春臺は實に訓讀論者である。英文に就いていはせたならば、確に英文訓讀論者即ち、純粹の正則の流義を主張する者であらう。

予は如何に精讀しても變則讀の人には英文の妙味思想の波瀾などは到底わかるまいと確信して居る者であるから、春臺の此の說には徹頭徹尾贊同する者である。即ち英文の勢や、味や、作者の思想の波瀾や漢急やなどは、どうしても直讀でなくてはどうしてもばわからぬと同樣、漢文の勢も妙味も、又聖賢の意趣も、直讀でなければ、英文の讀方と等しく正則流に即ち上より下へ直讀するようにしなければどうしてもいけぬということを春臺同樣に斷言する。しかしながら、諸君、諸君は漢文

を專門に學習して居る人々でない。諸君は、目下の處、漢文を專門に學習する必要のある人でない。然れば則ち、漢文直讀のことは諸君に向かつてしふべきことではない。諸君は、たゞ適當なる、我が國語を媒介として、漢文にて書いてある事實の大要を了得することが出來そして漢文に於ける文字の措置法の大要を會得することが出來れば夫れで十分なのだ。否或度まではその媒介者の我が國語が不適當であつてもその事がらがわかりさへすればそれで十分なのだ。但し予等は我が國語の消長變遷に常に留意して居る者、恐れるのは、その不適當な場合によりては不完全な媒介者が久しく慣用せられる處から、漸く諸君の口になれて來て遂に諸君をしてその不適當な不完全なるに氣がつかぬ樣にし、更に手足を伸ばして我が國語を亂すに至るをだ。佐藤一齋の使用した訓讀語の如きはその好適例だ。

諸君、予は決して諸君に向かつて日尾荊山の訓點本、中村惕齋の訓點本、林道春の訓點本等をしひるやうなことは爲ない。たゞ、予は諸君に向かつて穩當な溫雅な口語を用ゐて漢文を訓讀せられることをば切望するのだ。たゞ、予は諸君に向かつて穩當な溫雅な口ない、英文に於ても訓讀の時には同樣にせられることを切望するのだ。

嬉しい禮拜堂

……扨てフォントルロイが席に着きましてから見た事で、二つ嬉しい事がありました。一つは、會堂の向ふの方で、自分の見てられる處は母さんが坐つて入らしッて、自分を見て、にッこりして下すッたこと。も一つは、自分たちの腰かけてゐた、長椅子の奥の方の壁に、面白さうな石の彫物が有つたことでした。これは、二人の異樣な人が、向き合つて、跪いて居る姿でした。二人の間には、石造の經本を三つ載た丸柱樣の物が有つて、兩人とも祈念に凝つて居る處と見えて、雙の手を合せて居ります。服裝は餘程叮代の物らしく、下の碑に書いてある字を漸くに拾ひ讀み致しますと『第一世、ドリスユート侯爵、グレゴシ、アルサ并びに夫人アリソン、ヒルデガードの墳墓』といふことが記してありました。古文のことゆゑ、級字は今と多少趣きが變つてゐて、例へば、今日、i を遣ふところにyの遣つてあるのは、his wife とあるべきところに bys wyfe と書いてある類で、また字の終りに、益にもたゝぬeの字が附けてあるのは、body, Earl とあるべきのを boiye, Earle と書いてある類でした。フォントルロイ殿は、不審が晴したくて、堪らぬ樣子で、とう〳〵思ひ切つて、老僕の耳に口をよせて「お祖父さんをつと耳こすりして も好いですか？」「何だ？」「あの、此の人たちは誰になんです？」「あれがれ、あれは貴樣の御先祖で、幾百年も昔の人なんだ」。フォントルロイどのは、今度は、勿体なさうに眺めて「さうですか、それぢやあ、僕の親戚は、此の人たちに似たのかも知れませんれ」

（ミセス、バーチット著『小公子』の一節）

文の形式

文學士　横地清次郎

思ふ事いはぬは腹ふくるゝわざと兼好法師が『徒然草』に物してから、後の世の文藝に携はる程の者筆執る毎に必ず式の樣に此の諺を前置にして思ひを述べ、腹をすかすのが例になつて居る。此の諺は一寸趣味のある言葉で、兼好以前古くより國民の口にありしと見え『大鏡』といふ書にも、おぼしき事いはぬはげにそ腹ふくるゝ心ちしけるとかゝれば昔の人は物いはま欲しくなれば穴を掘りては言ひ入れ侍りけめと出て居る。思ふ事腹に滿ちて言ひ出すべき機會を得ないのは、勿論不愉快に相違は無い。穴を掘つて、其内のへ言ひ入れで、胸の塞を散じたくもなるは無理ならぬ事であるが、思ふ事有りて言ふべき折の無いのは、まだしも結構なる事我れ等は言ふ可き機會を得、言はざる可からざる必要に迫られながら、而も言ひ表はすべき手段方法に於て大いに窮するは、往々有る事である。思想を表すべき言語

の賜は、我等日本人も、世界の人並に神より授かつて稍〻のうちより、母の懐にあり
し頃より聞き慣れ、遣ひ馴れて、一ト通りの考へでは不都合なく言ひ表はすことが出
來るが、不幸にも言と文と姿を異にせる今日に生まれ遭うた我等は、日常の口語の
外に、文字の方便を借りて、形式の違つたる單語を綴り合はせたる文章といふもの
を稽古せねばならぬ。時間と空間とを隔てゝ、我が思想を有効ならしむる唯一の
方法は、文章を措いて他には無い。それで、我等は小學の入門に五十音圖で假字を
習ひ始めてから今日迄、皆文章の研究に憂き身を憔すのである。如何にせば、思想
を簡單に明瞭に、正當に誤解の憂へなく他人に傳ふる事が出來るかといふ事は文
法にて教はる。思想を美しく修飾し讀む者に快感を與へ、文章の効果を顯著なら
しむる方法は修辭學にて習ふ。普通學の諸科にて學び得たる智識を整理し同化
したる後、これを我が物とし我が思想として發表する凡ての手段は、主として國語
漢文の教育より得るのである。

右述べたる如くで、文法の必要は今更喋々する迄も無い。諸君も、萬々承知して居
ながら、其研究に趣味を持つ人は誠に少數であつて、中學の或る級一組五十人程の

中で文法の講義に熱心に傾聽する生徒は僅かに三四人を出でない。一般の生徒
は解らぬまゝ講義を鵜呑みにして、學期學年の試驗場で申譯の答案を書いて點取
りの責を塞ぐのみである。眞面目な不審なぞは持ち出す者は無い。これ一には
文法の理解し難きにも基するのであらう。文法の細則は各中學の科程にて稽古
して居らるゝことで有るから、今は概括的、復習的に文章の構造を解し易く説明し
て見よう。

文章の構造を知るには、先づ、文章の何たるかを知らねばならぬ。文章といふ語に
も種々の意味があるが、日本文法で文章といふのは、吾人の言語を文字で書き記し
て思想の完結した者をいふので委しく云へば、人の思想を表はす音韻が所謂言語
であつて、其言語はそれ〴〵完結せる思想を表はして居る所の章に切り別かつ事
が出來る。此の章即ち言語の一切が一文章なのである。一文章はまた數個の部
分に切り別ける事が出來て、その一部一部は種々なる性質を備へて互に相違した
る點が有り、これを適當に配合し組み合はせて我等は完結したる思想即ち文章を
作り出す事が出來る。此の各部分を單語と名づける。さて、其の單語の性質品類

に種々の別があるから名詞、動詞、形容詞などいふ品詞の差別が生ずるのである。

以上で先づ、言語と、文章と、單語と、品詞といふ事が解つたから、今度は文章の内容に入らう。完全に纏つたる一思想の内には、何時でも二個の成分が無くてはならぬ即ち「何が何うした」とか「何は何うである」とかいふ何に當たるものと、「何うした」「何うである」に當たるものとの二つで、一は說述の主體であるから、これを主語と名づけ、一は其の主體に就いて說述するから、これを述語と名づける。此の事は諸君も既に承知して居る所で、如何なる文章も、少なくとも、一の言語と一の述語とを具備しなくてはならぬ。又文章によつては二個以上の主語と述語とを具へて居るものもある。その主語述語に色々の詞が添加せられて文章が段々と複雜になる有樣を物の譬へで解り易く諸君に示さう。

夫婦は人倫の大綱、一の家庭は一夫と一婦との同棲より成るものであるが、この家庭を文章の組み立てに譬へて見ると、夫は一家の主宰であつて文の主語に當たる。妻は夫の命を受けて家政を處理する、その働きは丁度文の述語に相當する。即ち一夫と一婦とで一家庭を組織し、一軒の家に住居し戸籍上一戸をなして門構のある一の屋敷に住まふものとして便宜の爲め圖に示して見るとかくの如くなる。

第一號

主人	
主婦	

これを假りに第一號の家庭と名づけ置く。この家庭には主人と主婦との二人のみで、子も無ければ、下女下男も無い。主人の父母即ち主婦から見て異姑に當たる人も居ない。又主人の側妻君の側の厄介も一人もない。世間に謂はゆる夫婦かけ向かひの氣樂なる家であるが、これでも立派な一家庭であつて戸籍の上も獨立の一戸である。

さて此處まで述べて置いて文章の方へ立ち還ると、一の主語と一の述語とのみにて一個の完全なる文を組み立てる場合が即ち、右の第一號の家庭に相當するのである。

雪白し。　花美し。　山高し。　海深し。

雨降る。　　天晴る。

風吹く。　　月出づ。

等の文は、皆、此の場合に當たるのである。但し、此の例に就いて調べて見るに述語に二樣の別がある。即ち妻たる者に素性の違ひがあるとでも言はねばならぬ。右の例の第一行にあるのは文法でいふ形容詞が述語と爲つて居る場合第二行にある[illegible]のは、動詞が述語となつて居る場合で、これを家庭の譬に當てゝ適切なる區別を示せと要求せられては、少々窮する所であるが、先づかう言ふたら解せられるだらう。一方は妻君の里方に人手が有つて家政が多忙で妻君の手に餘る時は何時でも里方から手傳が來る。一方は妻君の里方に人手がないから、家政の繁忙に窮した時里方の援助を直接に借りる事が出來ぬ。さて此里方の援助手傳といふは文法では何に當たるか。今第一號の家庭が內輪の手が回らないで補助を借りた場合を左に示さう。

雨降らず。　　天晴れたり。　　風吹きけり。　　月出でぬ。

此の例で解せられるだらう。妻君が如何に立ち働いて見ても用が辨ぜぬから、止むを得ず里方の補助を借りたのである。此の手傳に來た人は先づ妻君の妹でも

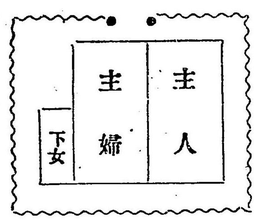
有らうか、切揃立働も充分に出來て、而も身內であるから萬事心を許して打ち任せても妻君の位置を脅迫する如き憂は無いのである。所が里方に人手が無い賴るべき親戚が無い妻君は誠に憫むべきもので、別に人を賴まねばならぬ。その賴まれた人も、また自身の手助けに身寄の者を連れて來るから、隨分と事が大袈裟になつて容易ではない。

山高からず。　　海深からず。

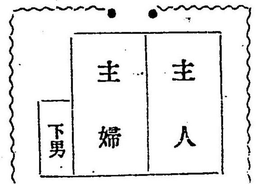
此の場合に於ては、妻君は高みに見物の有樣で立働は一切雇人任せの姿、極めて樂な代りには、家政の實權は、往々雇人の手に左右される事があるのである。西洋では此の筋の婦女は本當の妻となる事が出來ない。即ち歐文では形容詞が完全の述語となる場合は決して無い。さて、右に述べた補助手傳といふのは、文章では助動詞に當たるので、形容詞の否定を表はす場合に於ては直接に助動詞の助を借る事が出來ぬから、助動詞を伴ふ所の動詞の助を要するのであつて、動詞、形容詞は共に文の述語となるを得るとはいふものゝ此點に於て區別があるから、右の手傳の例によつて諸君がこれを記憶することを望む。

さて、家の格、夫の身分、妻君の生ひ立ち等によりて家庭の雜務を一切妻君一人で爲る事の出來ぬ場合もある。炊裁縫、金錢の出入迄も妻君一手では引き受ける譯に行かぬ。自ら下女、或は下男、或は下女下男の双方を用ゐる必要が生ずる。此の下女下男は妻君の配下に屬して家庭の雜務を分擔する。即ち一家を表と奥とに別けると、表には主人奥には主婦と下男下女と三人がある。

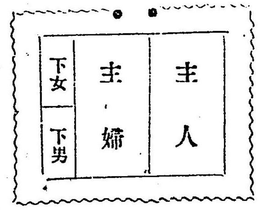
第二號



第三號



第四號



此の下女下男は、即ち文章では客語に當たるので客語に直接の客語と間接の客語と有るとすると、一を下女に當て、一を下男に當てる。動詞の述語となる場合に或は直接の客語のみにて濟む事あり、或は間接の客語のみにて濟む時も有り、或は直

接間接の兩客語を要する場合もあるから、右に示した如き三樣に別かれる。

右に客語を下女と下男とに當てたが、男と女とに別の義は無い、唯だ家庭の譬への便から斯樣にしたので、正しく言ふと容語となる語は主語となる語と同じである。から、主語を男とすれば容語も男でなくてはならぬ。即ち下女の代はりに下男の察を願ふ。

みを使はなければならぬ、けれども其處が譬喩と眞物との相違なので、其の邊は諒

さて第二號に當たる文の例は、

巡査賊を捕ふ。　大工家を作る。

等であつて、第三號に相當するのが、

松　庭に立てり。　船　水に浮かぶ。　子　親に似る。

軸　床に懸かる。　友　遠方より來たる。

等である。但し此の間接の客語は、それに添うて居る助詞即ち立爾波と一緒にして一の副詞句と見て述語の附屬物と見ても支障はない。第四號に當たるのは、

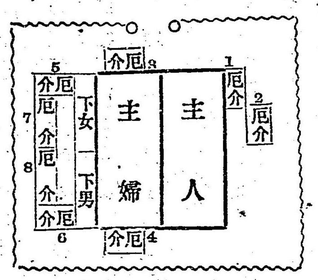
甲　手紙を乙に送る。　校長　卒業證書を學生に與ふ。

重力は　物體を地に引く。　高時　天皇を隱岐に流す。

等である。さては、を、に、より、等の立爾波は家庭の一員といふ程の價値は無いので、いはば人の着る衣服の樣なものである。即ち、その衣服にも下部にのみ特有の仕着せ號衣も有れば、主人主婦から下部まで誰れにも着られる着物もある。仕着の號衣を着る者は下部に限る。即ちを、に、へ、とより、から、まで等の格の豆爾波の付く語は、必ず客語である、は、も、ぞ、なむ、や、かだにさへすら等の添意の豆爾波は如何なる語にも付く、即ち誰れにも着られる衣服である。

何處の內にも厄介といふ者は、兎角有り勝ちなもので主人の親戚妻君の緣類等が家の厄介となつて同居をすることがある。また大なる家族即ち華族又は豪農、豪商等になると便はれて居る下部に厄介の附屬して居る場合もある。今、此の厄介を主人の側から先づ說明しよう。

主人の厄介に相當するのは文章では主語に屬する形容詞形容句、連體形の動詞等で妻君の厄介に相當するのは副詞或は副詞句である。下部即ち客語の側の厄介は主人の厄介と同一で、形容詞形容句、或は連體形の動詞である。今主人、主婦及び



下部に厄介の添うて居る大家の樣を例の圖に示すならばかくの如くである。

餘り厄介が多いから1、2、3の符號を附けて置く。

1は主人の厄介、2は主人の厄介の厄介である。

尤も主人の厄介は一人に限らぬ、幾人もある事がある。その厄介の厄介も一人には限らぬ、厄介の厄介3、4、は主婦の厄介、これも一人の時も二人の時も又三人以上の時もある。その厄介が厄介を持ち得ることは主人の場合に違ふ所は無い。5、6は下女下男の厄介で、7、8は又その厄介である。斯樣に複雜になり多人數にあつても、依然一家は一家である。今、これから斯樣な家庭に相當する文章の數例を示すから、何れが主人何れが主婦何れが誰れの厄介かを宛て欲めて見られよ。

樂しき春來たりぬ。　白き菊多く花壇に咲けり。

散る花は止むべからず。　墨堤の櫻今盛りなり。

入學の許可を得たる秀雄は直ちにその趣を故郷の父母に報じたり。

知れる人の妻昨日逝けり。

是等の諸例の中に於て、春菊、花櫻、秀雄、妻は主人即ち主語であつて、來たりぬ、咲けり、止むべからず、盛りなり、報じたり、逝けりは主婦即ち述語である。趣、父母、は下女下男に相當する客語である。樂しき、白き、散る、墨堤の、入學の許可を得たる、人の等は主人の厄介である。知れるは厄介の厄介である。その故郷の等は下女下男附きの厄介である。多く、花壇に、今、直ちに、昨日等は主婦の厄介である。

前にいうた通り、述語となる語は、動詞と形容詞とで、これを女に當てた。而して一般の女は必ずしも一家の主婦とは定まらぬ。他家に厄介になる事もある。動詞、形容詞の連體形は即ちこれに當たる。此の厄介は女性であるから時としては夫を持つて居る事がある。この夫はその妻からいうたら本當の夫ではあるが、妻が厄介になつて居る家庭の上からは主人とは言はれぬ。これを圖に示して見るなら斯樣である。

此の圖には下女、下男及び諸種の厄介を省いたが、これらは無論有る時も無い時も

第六號

厄介女（亭主持）
主人
主婦

ある。此の亭主持の厄介は主人の外に下女、下男にも附く事があるが主婦には決して附く事は無い、これは奇體である。さて文例は、

わが知れる人昨日逝けり。　　聲の美しき鳥庭の樹に囀る。

以上は、主人に厄介になつて居る、女即ち君等の夫を持つて居る場合である。

君の主張せし事遂に採用せられたり。

力の強き人あり。

今度は下部の厄介が亭主持である場合を示さば

余は味の淡泊なる食物を好む。　　甲も乙の行く學校に入學せり。

右は客語に淡泊なる、行く等の女性の厄介が附いて其の女は各、味、乙等の夫を持つて居る。即ち味を淡泊なるとの間乙と行くとの間には互に夫婦の關係は有るが味乙は一家の主人とはいへぬ。即ち、文章の主語では有いのである。

以上に述べた諸種の厄介に當たる語を文法では總稱して添加語と名づける、厄介

の厄介は添加語の添加語である。第一號以下順次列擧した種々の家庭は下部の有無厄介の多少こそ違へ、詮ずる處一の主人と、一の主婦とで組み立てたる一家で此外なほ本家と分家と同じ宅地に住んで居るものあり獨立の家庭が二個又は二個以上軒を並べて同宅地内に住居する場合もある。これ等第二類第三類の家は次回に讓る。

國語漢文

文學士　横地清次郎

文の形式

此處に述べるのは第二類の家で有つて圖に示す如くに第一類の家とは全く組織を異にして居る。即ち第一類に於ては下女下男及び厄介の有無は別問題として、必ず一の主人と一の主婦とが一家をなして一の屋敷を占有して居るのであるが、此の第二類の家は二組或は二組以上の主人主婦が同一の屋敷内に住居して居るのである。即ち第七號は此類の最も簡單なるものゝ一例下女下男及び厄介の無い夫婦かけ向かひの甲乙兩家が一の邸内に相隣りて家居を占めた場合で有つて甲家乙家各獨立の家では有るがその同邸内に住んで居る所から表通りへの出入の門は乙家の正面に設けて有つて甲家の正面には無い。それ故甲家は乙家の邸

第七號

甲家	
主人	
主婦	

乙家	
主人	
主婦	

内を通り抜けて乙家の門より出入をせねばならぬ。即ち甲家には正式の門が無いのである、即ち甲家は一家として屋敷の構が不完全である。さて丁度これに相當する構造の文章の例は左の通りである。

甲家　乙家　甲家　乙家

(一)　雨降り　風吹く。(二)　松青く、砂白し。(三)　甲去り　乙止まる。

雨風、松、砂、甲、乙等は主人即ち主語にして、降り、吹く、青く、白し、去り、止まる等は各、これ等に對する述語である。而してかく主語と述語とを具備せる一の文にして他の文の一節と爲つて現はるゝもの即ち第七號の家の甲家、乙家に當たるものを、文章法にては節と名づける。右に示した三文は各二個の節で出來て居る。甲、乙兩家は右の如く同邸内に住居はして居るものゝ、實は全く獨立の別家庭で有つて、謂はば懇意なる友人夫婦が便宜上一時同一の邸内に假住居をして居るのと同樣で都合によつては何時でも其家を交換して甲が乙の家に住む事が出來る、又各、獨立の家を持つて前述の第一類の家庭を作る事も自由で有る。さて甲家、乙家の住處を交換して見ると、此くの如くなる。

乙家　甲家　乙家　甲家

(一)　風吹き、雨降る。(二)　砂白く、松青し。(三)　乙止まり、甲去る。

此の例によつて見るに、甲と乙と家を取り換へたから、甲は正面に門構の有る立派な屋敷に住まふ事になつた。即ち門構の有る立派な屋敷に住む事になつた。即ちこれを乙より切り離して見ても形式上完全なる形式を具備して居る。風吹き砂白く乙止まり等は獨立完全の文章とは言はれないのである。

次ぎに甲、乙兩家が獨立して二戸となる場合は左の如くである。

甲家　甲家　甲家

(一)　雨降る。(二)　砂白し。(三)　甲去る

乙家　乙家　乙家

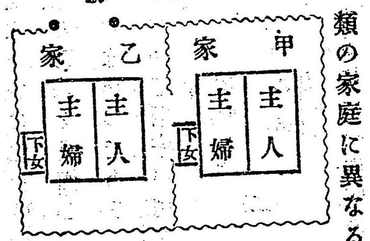
風吹く。　松青し。　乙止まる

かくするには今迄門の無かつた方の家に新に門を附けて遣らねばならぬ。即ち文の前節の述語の語尾を變じて終止形とせねばならぬ。

甲家乙家共に下女下男を備ふる事が有る。又諸種の厄介の附き添ふ事の有るのは

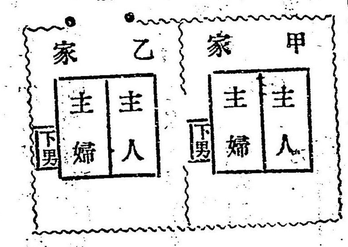
第一類の家庭に異なる事はない。

第八號



第八號の家は甲乙兩家に下女の居る場合即ち直接の客語の有る場合で有つて、

第九號



第九號の家は甲乙兩家ともに下男の居る場合即ち間接の客語の有る場合で有つて、

力山を拔き氣世を蓋ふ。

太郎笛を吹き、次郎太皷を打つ。

等の文はこれに相當する。第九

衣野に至り、袖腕に至る。第一軍平壤に向かひ、第二軍大連灣に上陸す。

等はこれに相當する。また、

爺は山に柴を刈り、婆は河に洗濯をす。

といふ文は、下女下男、即ち直接間接の客語を同時に具ふる例である。第二類の家

の仕組は先づ以上に述べた如くで有つて、その主人、主婦、下女、下男に種々の厄介の附き添ふ事即ち主語、述語に諸種の添加語の添はつて漸次複雑になり行く有樣は第一類の家庭で說明したのと違つた事は無いから、今は略する。

一夫一婦は人倫の大綱一人の夫が同時に數人の妻を持つといふ事は人間には有るまじき事であるが、文章では左樣で無い。一の主語が二個以上の述語を備ふる場合が澤山ある。これを家庭の譬喩で言うたなら一夫多妻を蓄ふる蠻人とでも言はねばなるまい。

我れは字を書き、書を讀み、又算術を學ぶ。

といふ文は丁度此の例であつて、これを圖に示せば第十號の樣である。

これは甲、乙、丙の三家が同一の邸内に住居をして居るので、主人は共通で甲家に住んで居るといふ有樣である。此の類の家も矢張り第二類に屬する。

次ぎに述べるのは第三類の家である。これは二組の夫婦が同邸内に住居して居る樣は全然第二類と同じ事である。圖に示しても全く同一で第七號の通りである。

が、而し家庭相互の關係が大いに違ふ。即ち第二類では甲家と乙家とは親しき朋

友の間柄で血縁もなく親戚でもない、無論財政は全く獨立で關係は無い。都合によりては何時でも分離して別宅に住居するのであるが、第三類の家は血縁上、財政上離るべからざる關係が有つて決して獨立して二戸となる事が出來ぬ。即ち甲家は乙家の分家の樣なるもので其の家庭は乙家の監督の下に立つて居る。但し分家はして居るが、その夫婦は主人主婦で有つて厄介では無い。他人よりも本家同樣に旦那樣與樣と呼ばれて、世間の交際にも其の通り招待を受ける時なども本家の夫婦と車を並べて出掛ける。華族でいふなら謂はゆる御連枝で爵のある一家である。さて此に當たる文例は、

第十號

甲 主人 主婦 下女

乙 主婦 下女

丙 主婦 下女

分家 鳳烈しければ 本家 船出帆せず。雨降りて 分家 地固まる。 本家

春は來れども、 本家 花咲かず。 分家 人老ゆれば、 本家 力衰ふ。

第三類の文も第二類のと同じく、節に別かち、本家に相當する節を主節といひ、分家に相當する節を屬節と名づける。而して第三類の家の場合では雙方とも獨立であるから、其に獨立節と名づける。第二類の家の附き添ふ場合は矢張第一類と異なる事は無いから例に因りて略する事にする。第四類の家は前者に比して稍複雜なもので言はば第二類と第三類との入り混つたもので、それに幾通りも有るが今其の一二例を示さうなら斯樣である。

甲といふ本家に乙、丙の兩分家が同居をして居る場合で

臣君を補け、 分家 君臣を用ゐれば 本家 國治まる。

といふ樣な文が丁度これに當たるので第十一號はこれを圖に示したのである。乙と丙と互に獨立なる兩家が同邸内に住んで居る所は第二類の家であるが、此の兩家ともに離るべからざる關係で本家の邸内に同居をして居る所は第三類の家

第十一號

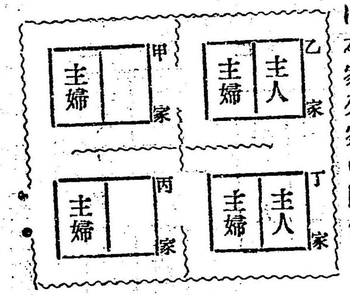
甲 主人 主婦

乙 家 主人 主婦

丙 家 主人 主婦

である。

第十二號



分家　本家　分家

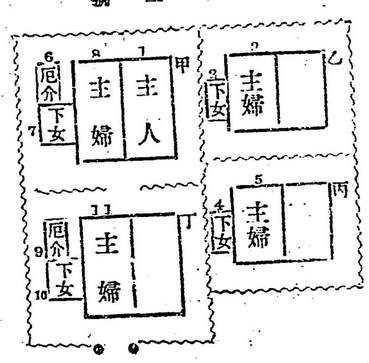
月盈つれば　缺け、物盛んなれば　衰ふ。

本家

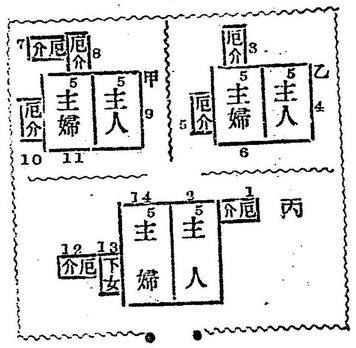
右のは本家分家の關係ある二組の家庭が同一の邸内に住居して居るので、第十二號に示す如く、乙は甲の分家丁は丙の分家であつて此の四個同一の邸内に住居して居る。但し甲の家と丙の家とは全く獨立であるから何時でも分離する事が出來る、其の點は第二類の家であるが甲丙ともに分家を持つて居る所は第三類の家に屬する。今度は今少しく複雑なる例、遊客油衣を着け笠を冠りて瀑布の下を潜り水背の奇勝を窮む。

といふ文を圖に示せば第十三號の如くなる。本家分家厄介の關係は一々指し示さないから、諸君自から當て嵌めて見られよ。

第十三號



第十四號



第十四號は、この瀑布、隆冬には氷柱長く懸かり、盛夏の候には冷風高く起こりて、絶勝中の絶勝を現出す」といふ文章を圖に作つたので有る。何の語が主人、何の語が主婦、何の語が厄介、何れが本家何れが分家であるか、諸君各〻當て嵌めて見られよ。

了解の出來ない場合には篇尾の解説に參照せられよ。

以上第一類より第四類まで精しく述べ來たつた所によつて、主人、主婦、下女、下男及び諸種の厄介、本家、分家獨立の同居等の關係が明瞭に解せられたならば、文章の形

式も一通りは了解する事が出來る。即ち主語、述語、客語、此等の諸題に付く添加語、添加語の添加語、主節、屬節、獨立節の區別も解せられたから、今度は譬喩を離れて文章の構造を示さむが爲めに解剖の例を左に示して講話を終へる事に致す。

文例

(一) 秋風は吹きな破りそ我が宿のあばらかくせる蜘蛛の巢がきを。
(二) 東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、あるじなしとて春をわするな。
(三) 世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。
(四) 谷風に解くる氷のひまごとに打ち出づる波や春の初花。
(五) 親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれいかに聞くらむ。

注意　主語、述語、客語の傍に整頭より一字下りに書したるは添加語なり。添加語の傍になは一字下りに書したるは添加語の添加語となりと知るべし。

括弧を施したるは略せられたる語を補ひたるものなり

解剖例第一

主部	述部
主語	述語　客語
秋風は	吹きな破りそ　我が宿の　あばらかくせる　蜘蛛の　巢がきを

解剖例第二

屬節		主節	
主部	述部	主部	述部
主語	述語	主語	述語　客語
東風	吹かば	梅の花	匂ひおこせよ　あるじ　なしとて　春を　わするな

解剖例第三

屬節		主節	
主部	述部	主部	述部
主語	述語	主語	述語
櫻の	世の中に　絶えて　なかりせば	春の心の	のどけからまし

解剖例第四

主部	述部
主語	述語　客語
春風に解くる　氷の　ひまごとに　打出づる　波や	春の　初花　（なる）

解剖例第五

主部	述部
主語	客語　述語
親を思ふ　心にまさる　親心	今日の　おとづれ　いかに　きくらむ

解說

第十三號。

乙丙の兩家は甲の分家にして甲丁は各獨立なる二家。

1 遊客 2 油衣を 3 着け、 4 笠を 5 冠りて、 6 瀑布の 7 下を 8 潜り、 水

9 背の 10 奇勝を 11 見る。

第十四號。

甲、乙の兩家はともに丙の分家なり。

1 この 2 瀑布、 3 隆冬には 4 氷柱 5 長く 6 懸かり、 7 盛夏の 8 候には

9 冷風 10 高く 11 起こりて 12 絕勝中の 13 絕勝を 14 現出す。

第八號 正誤

六一頁 第七行 其内のへは其の内への誤
六七頁 第一行 切揃は切回の誤
六九頁 第三行第四行 容語は客語の誤
七〇頁 第二行 立爾波は旦爾波の誤
七三頁 第十二行 明なは明この誤
〃 第十三行 有いは無いの誤
七四頁 第三行 第一頭は第一類の誤

四書の話

はしがき

文學士 久保得二

この講話に、少年諸君の御參考の爲めに、漢文學研究法とでも云ッた樣なものを、二三回續けて書いて呉れろといふ御頼みであッて、私も固より顯ふ處といふので、承知致しましたものゝ、追々歳末に近く、俗事多忙の上、まだ纏まッた考も出來ず、十分に取り調べる暇もありません故に、出鱈目の事を喋舌り散らすのも、學者の本分では無し、且つ親愛なる少年諸君に對して、御氣の毒でありますから、折角の問題は、他日に讓ることゝなし、今回は四書に就いて御話を致して見ませう。

四書といふのは、極めて世に有りふれた書物で諸君の御家にも祖父さんもしくは御父さんの手垢を留めた御本がきッと殘ッて居ることゝ考へます。それぱかりでは無く、諸君の中には、小さい時分「大學・朱熹章句・子程子曰」といふ素讀を御習ひになッた御方も、現在あることゝ思ひます。四書は、むかし德川時代の我が島帝國

に於ける學問の基礎でありまして、その結果も、なか〳〵大したものであります。

諸君は、小學以來、今日まで引き續いて、修身の話を御聽きに成ッて、中江藤樹だの、荻生徂徠だの、二宮尊德だの、いふ古しへの偉い人々の事蹟などは、十分御存知の事とおもひます。こゝに不思儀なのは、この三人の人が、さながら言ひ合はした樣に、四書の中に收めてある『大學』といふ薄ぺらな書物の爲めに感動され、刺激された結果、われだけの學者に成ッたといふことであります。この事は、或は御聞きになならなかッたかも知れませんから、次ぎに概略を話して見ませう。

中江藤樹が、まだ十二三の頃、叔父か何かの家に厄介に成ッて居て、その家の腕白小僧と一處に、大學の素讀を習ッたとき、「天子より庶人に至るまで、一に是れ皆身を修むるを以て本となす」といふ處を繰り返し〳〵讀んで、他日自分も、きッとこの樣に成りたいと言つたそうであります。次ぎに荻生徂徠が、幼時父の講居に伴はれて、上總の海邊に居たとき、書物といへば、祖父さんが寫して置いた『大學諺解』とかいふ本が一冊あるばかり、それを毎日々々讀んで義理を悟り、あれだけの大學者となる素地を作ッたのであります。最後に二宮先生の事は、今私の机上に載せてある『報

德記』といふ書物に、下の如く出て居ます。「これより、鷄鳴に起きて、遠山に至り、或は柴を刈り、或は薪を伐り、これを鬻ぎ、夜は繩を索ひ、草鞋を作り、寸陰を惜み、身を勞し、心を盡くし、母の心を安んじ、二弟を養ふことにのみ勞苦せり。而して採薪の往返にも、大學の書を懷にして、途中歩みながら、これを誦讀するが故に、人々怪み、狂兒を以てこれを目するものありき」云々。

以上の三人の偉いことは、言ふまでもありませんが、その内、中江先生は道德實踐家で、近江聖人と呼ばれた人。荻生先生は、大學者で、支那人さへも感服する位の人。二宮先生は經世家で、今では神と祭られた人。その偉大なる一點に至りては、德川時代三百年は言ふに及ばず、二千餘年の日本歷史をひろげても、一寸他に其の例が見付からぬ程で、それが『大學』といふ本の感化の爲めであるといふことは、實に興味ある一大現象といはねば成りません。諸君も、此の話を御聞に成ッたなら、『大學』とは、どんな本か、乃公も一つ讀んで見たいものだといふ樣な御考が起こるに相違ありません。そこで私が四書の御話を致すのでありますが、マア一寸待ち玉へ、本

に於ける學問の基礎でありまして、その結果も、なか〳〵大したものであります。

諸君は、小學以來、今日まで引き續いて、修身の話を御聽きに成ッて、中江藤樹だの、荻生徂徠だの、二宮尊德だのいふ古しへの偉い人々の事蹟などは、十分御存知の事とおもひます。こゝに不思儀なのは、この三人の人が、さながら言ひ合はした樣に、四書の中に收めてある『大學』といふ薄ぺらな書物の爲めに感動され刺激された結果、われだけの學者に成ッたといふことであります。この事は、或は御聞きにならなかッたかも知れませんから、次ぎに概略を話して見ませう。

中江藤樹が、まだ十二三の頃、叔父か何かの家に厄介に成ッて居て、その家の腕白小僧と一處に、大學の素讀を習ッたとき、「天子より庶人に至るまで、一に是れ皆身を修むるを以て本となす」といふ處を、繰り返し〳〵讀んで、他日自分も、きッとこの樣に成りたいと言つたそうであります。次ぎに荻生徂徠は、幼時父の謫居に伴はれて、上總の海邊に居たとき、書物といへば、祖父さんが寫して置いた『大學諺解』といふ本が一冊あるばかり、それを毎日々々讀んで、義理を悟り、われだけの大學者となる素地を作ッたのであります。最後に二宮先生の事は、今私の机上に載せてある『報

德記』といふ書物に、下の如く出て居ます。「これより、鷄鳴に起きて、遠山に至り、或は柴を刈り、或は薪を伐り、これを鬻ぎ、夜は繩を索ひ、草鞋を作り、寸陰を惜み、身を勞し、心を盡くし、母の心を安んじ、二弟を養ふことにのみ勞苦せり。而して採薪の往返にも、大學の書を懷にして、途中歩みながら、これを誦し、少しも怠らず、これ先生聖賢の學の初なり。追路高音にこれを誦讀するが故に、人々怪み、狂兒を以てこれを目するものあり」云々。

以上の三人の偉いことは、言ふまでもありませんが、その内、中江先生は道德實踐家で、近江聖人と呼ばれた人。荻生先生は、大學者で、支那人さへも感服する位の人。二宮先生は、經世家で、今では神と祭られた人。その偉大なる一點に至りては、德川時代三百年は言ふに及ばず、二千餘年の日本歷史をひろげても、一寸他に其の例が見付からぬ程で、それが『大學』といふ本の感化の爲めであるといふことは、實に興味ある一大現象といはねば成りません。諸君も、此の話を御聞に成ッたなら、『大學』とは、どんな本か、乃公も一つ讀んで見たいものだといふ樣な、御考が起こるに相違ありません。そこで私が四書の御話を致すのでありますが、マア一寸待ち玉へ、本

文に取りかゝる前に、まだ一寸申して置かねばならぬ事が御坐ります。

諸君、並にかく申す拙者どもの祖先が、生命に換へてまでも保持した武士道といふものは、たしかに大和民族の特色を發揮したもので、朝日に匂う山櫻と其の美を競ふものでありますが、その根抵は、あくまで儒教的精神に在るので、四書に於て、その萠芽を見出だすことが出來ます。『論語』に、「義を見て爲さいるは、勇なきなり」といひ孟子に、「志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪ふを忘れず」といひ、ともに武士道の極致であッて、今日でも、吾々の耳に、如何にも涼しく、且つ潔く聞こえるところの格言であります。

四書といふものは、吾々の祖先に對して、かくの如き偉大なる、効果を及ぼしたものでありますから、たとひ其の中には、今の世に行はれぬ事柄があるにしても、決して棄てたものではありません。私は諸君が他日追々學問が進み、精神の修養に注意される樣に成ッたら、必ず此の書を机邊に備へられむことを希望します。いよいよまでもなく、一家には必ず家風があると同じく、一國には必ず特有の道徳があります。今後の大和民族は、歐西人文の美を取ると同時に、何時までも舊來道徳の美を

維持して行かねばなりません。されば、四書を以て單なる孔孟の遺書と爲さず、其の内に御互どもの祖先道徳の理想を見付けるのが、特に肝要なことゝ考へられます。

私が少年諸君に對して、四書を勸めたのは、上の如き理由に本づくのであります が、これから御話いたす事柄に就いて、前以て御淸聽を煩はしたいことがあります。

すべて古書といふものは、歲月の久しい間に、或時は、その實質に於ても、幾多の沿革變遷を經るものであッて、今傳はッて居るものは、必ずしも古來の面目を其の儘に存して居るものではありません。されば、書を讀まむとするには、先づ其の書の内容品質を明らかにするは勿論、その源流を尋ね、その沿革を審かにし、その眞贋を別かち、その注釋の如きも、成るべく精確にして缺點の少ないものを擇ばねば成りません。そこで、私は四書の解題を試み、その何者たるかを諸君に知らせようとするのでありますが、おまり專門的に亘すれば、却ッて惡いと考へますから、勉めて平たく申し上げて見ませう。

四書の名目

四書といふのは皆さんすでに御存知の通り『大學』『中庸』『論語』『孟子』の四部を總稱したものでありまして、今日では、一口に四書五經といひ、孔子の末流即ち儒家の聖典と定められましたが、その實四書といふ名目の決まりましたのは、案外新らしい事で、戰國時代の六經、西漢時代の五經に比すれば、殆んど千年ばかりも後の事であります。

四書の中、『論語』は、むかしから、その價値を認められ『孟子』は、兎角の議論がある にしても、幾分世に知られ、二書ともに單獨に行はれて居りました。然るに、他の二書は元と『禮記』といふ書物の中に挿まッて居て『大學』はその第四十二篇『中庸』はその第三十一編となッて居たので、決して單行したのでは無く、又特に之を論じた學者も無い位でありました。しかし、本來價値のあるものは、そう何時までも埋まッて居るものでは無いので支那に於て、宋の中頃、兩程子(即ち程明道、程伊川)といふ兄弟とも有名な學者が、新に『禮記』の中から引き抜いて、別冊の書籍となし、之れを『論語』『孟子』に配してはじめて儒家必讀の書籍と定めました。

程子の弟子の張九成といふ人が、『四書解』といふ本を作りましたから、四書といふ名目は、この際すでに決まッたことゝ考へられます。次ぎに朱熹即ち普通に朱子と呼ばれて居る學者は、其の書の順序を整へ、その注釋を作りましたから、四書は見る〳〵天下に流行することゝなりました。

それから元の時には、朱子學が盛んに行はれました故に、官吏登用試驗にも、四書の解釋を第一となし、その答案は、必ず朱子の説に從はねばならぬといふことに決定しましたが、引き續いて、明の代になると朱子の注釋に關する宋元諸家の説をかきあつめ、勅撰を以て、『四書大全』といふ書物を編纂し、官吏登用の際には、此の本から、きッと問題を出すことにしました。されば、明代の學者どもは誰れでも、彼れでも、この『四書大全』一部を金科玉條と必得、その説に間違ッたところがあらうが、どうしようが、そんな事には一向頓着なく、寢ても、起きても、此の本と首引といふ狀態で、今まで殘ッて居た古傳舊解は、少しも顧るものが無く、その爲めに、明朝の經學は、甚だ振ひませんでした。そこで、顧炎武といふ大學者が、「嗚呼經學の廢する、實に此れより始む」と絶叫したのも、決して無理ではありません。これは畢竟、朱子が注釋を

施した四書をあまりに尊信した弊風であります、一方から見れば、四書が如何なる勢力を學界に及ぼせしかを考へることが出來ます。

四書の次第

前に朱子が四書の順序を定めたと申して置きましたが、それは今日のとは、大いに違ッた者であります。程子朱子の決めたのは、第一が『大學』で、それから『論語』『孟子』最後に『中庸』といふので、これは中に含んで居る義理の高卑難易を標準としたものと考へられます。それが證據には、朱子語類といふ書に、學問は須らく大學を以て先となすべく、次ぎは『論語』次ぎは『孟子』、次ぎは『中庸』、『中庸』は工夫密にして、規模大なりと明言してあります。

四書は、上の樣な順序を定式として、元より明の頃まで傳はりましたが、一番始めの『大學』と、一番終りの『中庸』とは、本が薄べらで、他の二書と釣り合はず、製本した工合が、どうも妙でないといふ處から、便宜上『大學』『中庸』を合本して、一冊となし單に『學庸』と題することが、何時となく流行出しました。前に述べた『四書大全』なども『大學』『中庸』を先にし、論語孟子を後にしてありますから、今日四書の順序は、この

時代から起こッたものに相違ありません。

四書の傳來

「四書は、何時頃、我が日本に傳ッはたか」といへば、論語は、先刻御承知の通り、應神天皇の十六年（西暦二七四）に、百濟の博士王仁が、始めて之れを傳へ、その後、支那の書籍は、どし〳〵傳はッて來て、『孟子』や『禮記』も、勿論日本で講習して居ましたから、學庸論孟、四部の書は、元より我が國に存在して居たのであります。それで、四書とは、取りも直さず、朱子が注釋を加へた學庸論孟といふことであります。

「四書は、何時頃、我が日本に傳ッはたか」といふ問題は、一方に於て、朱子學傳來の起原を說明するものであります。何故といへば、論語孟子といふことに一寸した話、どうでも善い樣な事でありますが、實はなか〳〵以て容易ならぬ事で、かくの如く名目を正して置かないと、飛んでも無い間違を來たし、謂はゆる毫釐の差、遂に千里を誤るといふことにも成ります。

そこで、我が國の歷史を調べて見ますると宇多天皇の寬永七年（西暦八九五）に菅原道眞の建議により、我が國を支那との國際上の交通を斷然廢めて仕舞ひました。しかし、此の後とても、僧侶の輩は、「宗法研究の目的を以て、相變はらず彼方へ渡航し

ましたから、其の中の或者が當時支那一般に尊崇されて居た朱子の四書を一寸覽て、幾多の點に於て、佛家の所說と暗に類似したところがあるのを喜び、取り敢へず、之れを携へ歸り、何時となく、我が國に傳はッた者と考へられます。しかし、多數の歷史家は、例の考證主義で、何年といふことをきちんと定めようといふので、今日の處では、數說併び存して、どれが本當か、一寸判別に困る程であります。これは、少しく專門的であるかとも思はれますが、覺えて居たとて決して御損の無いこと故に、左に概略を記して置きませう。

（第一）後小松天皇の應永十年（西曆一四〇三）に渡來したといふ說……

これは、時代が比較的に近いので、以下列擧する諸說は、だん〳〵古るい處へ昇ッて行くのであります。この說は、中村惕齋といふ學者が、言ひ出したので、應永十年癸未、南都の歸路、『四書集注』『詩經集注』を載せて來り、同年八月三日、之れを洛陽に達す。こゝに於て、東福寺不二岐陽和尙、始めて之れを講ずとあります。こゝに在る南都は、日本の奈良ではなくて支那の南京であります。この說は、どこから出たものか、その根本は善く分かりません。その上、こゝに在る應永十年より二十五年前、

康曆年間に於て、京都で四書の新注を講義した者があッたといふことが有名なる五山の學僧義堂和尙の日記に見えて居ますから、この說は元より信用することが出來ません。換言すれば時代が遲すぎたのであります。

（第二）後醍醐天皇の元弘西曆一三三〇頃以前に、玄水廣信之を傳へたりと云說……

玄水廣信は、河內守と稱し、伊勢の人で、後醍醐天皇に事へて居たそうですが、ある年、都に在留の時、藤原藤房卿と學問を論じ、「朱子といふ大學者の作ッた本は、五六年ばかり前に、やッと渡ッて來たが、まだ誰れも見ない。しかし、自分は、幸にも之れを得て、幾度も讀んで、よく〳〵味ッて見たが、なか〳〵面白い。若し御入用なら、何時でも貸して上げるから、隨分研究して見なされい」と言ッたそうだが、藤房は、儒佛混合であるから、別に見ようともしなかつた。それから廣信は、後に謀を以て去り、何處へ往ッたか、分からなく成ッて仕舞ッたといふことであります。この話は、元祿の頃、二山伯養といふ學者が、當時第一の系圖學者といはれた佐々木玄信といふ人に逢ッて、その妻玄水氏の祖先の事を問うて見た時、玄信が、口から出まかせに述べ立てたもので、之れを證明すべき歷史上の事實が、丸で見付からないから、

勿論信用することは出來ません。しかし二山伯養は自分の妻が、かゝる名家の末であるかと、甚だ嬉しく思ひ、當時藤井懶齋といふ學者が『國朝諫諍錄』といふ本を編纂して居ると聞き、どうか其の中に書き加へて呉れろと申し送り懶齋は學友の頼といふので、一も二もなく承諾して、其の通りにしたが故に、最も廣く世に行はれて居ますが、一盲人の妄言を、かばかり淺墓にも信じ過ぎて、後世を惑はしたのは學者に似合はぬ不愼重の振舞といはねばなりません。

（第三）後醍醐天皇の建武前後（西暦一三三四―三五）に、僧玄惠之を傳へしと云ふ說といふ書物に見えて居るので、貝原益軒の『和事始』も、之れを承けて居ます。玄惠が四書の講筵を開いたといふのは、どうも本當らしい。そして、この玄惠は、親應元年（西暦一三五〇）に死んだ人であるから、いくら遲くも、その前に四書の傳はッたといふのは、事實として差支なからうと考へられます。この說は、これより遲くないといふ議論の證據にはなるが、誰れでも、もッと前にあッたらうといふ推測を起さない譯には行かない。

（第四）後深草天皇の正嘉年間（西暦一二五七―一二五八）に渡來せしといふ說……

茅原虛齋といふ學者の作ッた『茅窓漫錄』に、日野弘資卿の手錄を引いて、

四書は、正嘉の頃始めて渡りたれども、その後打續きては渡らず。公私ともに之れを用ゐるに至りしは、文錄以來なり。

とあります。この說は、一寸見たばかりでは、如何にも曖昧であッて根據とすることが出來ぬ樣であるが、よく〳〵考へれば、必ずしもさうでは無い。この時代前後に於て、道元圓爾覺心紹明などいふ有數の名高い坊主が、支那に航し、彼方からは、道隆普寧子曇などいふ名僧が來朝し、彼此の來往が、可成頻繁であッたから、この頃彼の國に尊重されて居た四書は、きッと此の間に於て、我が國に渡來したに相違ない。そこで、新井白石も『退私錄』に於て、下の如く云ッたことがあります。

朱子の『小學』を輯められしより、年數七十年程のことならむ、相州金澤にて、越後守顯時八十以後の奥書かきたる本の文庫より出でし『小學』を見侍りぬ。但し嘉言の註は逸しけるなり。此の頃聞きしに、又世に其の時嘉言の註ある金澤文庫の『小學』を寫せし人あるなり、それを合はせて印刷にして世に行ひたし。

『小學』も『四書集註』も、ともに朱子の作ッたものでありますから、すでに『小學』が傳ッたといへば、四書の傳來も、この前後に在ッたに相違ない事であります。

以上の諸說を總括して斷案を下せば、四書は北條氏の中世、即ち朱子歿後、六、七十年の頃に於て、すでに我が國に渡來し、足利氏の初世から、漸く公卿縉紳の間に行はれたのであります。しかし、その渡來及び傳播に功勞のあッたのは坊主どもであります。なぜといへば、前にも一寸述べた通り、四書の朱註は、佛說と幾分似て居るところあるが故に坊主どもは、大いに喜び、從來我が國に行はれた漢唐の學を抑へ、間接に佛教を儒者の間に進める時の手引にしようと考へたのであります。そこで、第一に四書の講義を試みた玄惠だの、道秀だの、義堂だの、竺華だのいふのは、いづれも禪宗の坊主でありました。後世德川氏の初めに、藤原惺窩といふ學者が、相國寺の坊主から身を起こし、我が國朱子學の開祖となッたのも、決して不思議な事ではありません。

元和偃武の後、林道春即ち普通に羅山といはれる學者が、德川家康に登庸され、その子孫は、林家といッて、三百年間、天下の學政を監督し、朱子學を以て官學となしたが故に、朱註の四書は遍く世に行はれ、始めて文字を習ふものゝ教科書となり、家庭に於ける唯一の證典となり、最初に述べた樣な大影響を及ぼしたのであります。

しかし京都の禁裡に於ては、王朝時代の遺風を傳へ、漢唐の註疏を、相變はらず講讀も分からぬのに、講釋して居ましたが、後光明天皇は『惺窩文集』の御序をさへ作られただけに、朱子學を何となく好まれたと見え、遂に朱註の四書を講ずることになり、漢唐の註疏は、全く勢力が無い樣に成ッて仕舞ひました。

これまで述べた事は、諸君に對し、あまり面白く無かッたかも知れませんが、どうも順序として、省略する譯に行かなかッたのであります。次ぎには四書中の各書が、如何なる歷史と內容とを持ッて居るかに就いて、極めて簡明に御話して見ませうと思ひます。

新年所見

丹波花南

陌頭裘馬自輕肥　說是賀正公子歸
官柳一枝兩柳綠　早扶春影上朝衣

起句杜甫の秋興、同學少年多不賤、五陵衣馬自輕肥より來り、承句之に接して、一氣流注、言外の餘意を領すべし。陰陽曆革りしと雖も時節一たび新年に入れば、景物自から和煦なるを覺ゆ。況んや鳳城の下、御溝恩波を湛ふる處に於てをや。白虎門前、青龍溝口、路傍の官柳、すでに一枝兩枝の嫩綠を染むるあり、可憐の矜影、軟風に扶けられて、公子の朝衣に上る。昭代象あり、唐人早朝の詩と相似て、長短各その跡を恣にす組意獄貼、極めて瑣碎の處に於て、優に才思を見る。扶の一字、何等の巧思。

（久保天隨氏著『本朝絶句評釋』の一節）

國語漢文

大學の話

文學士　久保得二

（一）著作の由來

今度は、愈四書中の各書に就いて、多少詳しい御話を致すことにして、第一に大學著作の由來から始めて見ませう。

大學は、如何にして出來たものであるか、二三年前出版されたジャイル氏の支那文學史には、下の數行が見えて居ます。

In the Ta Hsüeh, or Great learning, which forms Sect. XXXIX. of the Book of Rites, and really means learning for adults, we have a short politico-ethical treatise, the authorship of which is unknown, but is usually attributed partly to Confucius, and partly to Tseng Tsan, one of the most famous of his disciples.

（右譯文）

禮記の第三十九篇を形成せる大學の書は、實に成人の學の何者たるかを說明し

たるものにして、簡短なる政治道徳的議論なり。その著者は、明らかならずと雖も普通に、その一部を以て孔子の手に成れる者とし、他はその弟中の最も有名なる一人曾參の作るところなりといへり。

しかし、この説は、十分でないのみならず、斷じて誤謬といはねばならぬ。予が私見を以てすれば、大學は、支那上古、謂はゆる三代の間に行はれた始源的倫理説を書き留めたものであつて、その筆者は、大方孔子の孫の子思でもあらう。

どこの國でも、すでに社會を形成するからには、古代に於て、必ず倫理説の萌芽が自然に出て來るものであつて、その後哲學が起こつて、その基礎から之れを説明し愈眞理なることを斷定する樣になるものである。そこで歐西文化の源泉といふべき希臘に就いて考へて見ると、その開國の初めに於ては、七聖人といふがあつて樣々の道徳的訓言を垂れて、その同胞を敎化したので、ソロンは「度を過ぎす勿れ」といひ、クレラブレスは「適度は善の極なり」といつたのなどがそれである。之れに次いでヘラクリタスの如き、デモクリタスの如き、或は詩聖ヘシオドの如き、エピースのスの如き、ソホクレスの如き、いづれも多少進歩したる觀念を以て深遠なる立

論をなし、科學的反省を試み、道徳その者の性質を明らかにしようと企てた。しかし、まだ人文一般の進歩が極めて幼稚であつたが故に、これ等の道徳説も、要するに地方的道徳現象の沈澱物といふべきものであつて、議論の普遍性を缺いて居たことは、言ふまでもないが、人種の特色は、却つて此の間に於て明晰に表顯されて居るのである。しかし、改進の氣運は、すべての舊慣的行動を破壞させるものであつて波斯戰爭以後は、愈〻かくの如き傾向を取るようになり、舶來の道徳説はその立場を失ひ、とても人心を維持することが六かしくなつて來たから、ソクラテスといふ大哲學者が起こつて、明確なる知識概念の上に新道徳を建築し、やがて萬古學術の淵源を開いたのである。

支那に於ても、矢張この通りであつて、三代の昔堯舜禹湯文武周公から傳はつた道徳的訓言は、次第にその勢力を失ひ、平王東遷の後、天下の形勢一變し、遂に人心の廢頽を來たした故に、孔子が起こつて、之れを革新せむことを企て、やがて謂はゆる儒敎なるものを建設したのであつて、孔子の議論の究極するところは、道徳を以て天から特に人類に授けられた必然的現象としたのである。孔子とソクラテスと

は、かゝる點に於て、東西全く其の軌を同じうしたものであつて、之れを見ても、人間の歴史には、自ら一定の通則が存在して居るといふことが分かるのである。

それから、人文の進歩といふものに必要にして且つ十分なる二大要素がある。それは何かといふに、史的觀念の尊重と獨立思想の興起といふことである。この兩者は車の兩輪、鳥の兩翼とでも云つたようなものであつて、必ず相待つて平行して行かねばならぬものである。史的觀念の尊重とは、取りも直さず過去の歴史を審かにし、前人の功績を認知することで、獨立思想の興起とは前人の未だ足らざる部分を改善し、若しくは進歩せしめ、之れを以て圓滿完美の域に近づかしめることを企てるものである。すべて人間の事業といふものには、自ら順序があつて漸々に出來上がるもので、前人の成したのが三といふ數で顯はされるものならば、予輩の子孫は更に一を加へて之れを四にすべく、予輩は更に一を加へて之れを五にし、又更に一を加へて之れを六にしかくて其の極たる十に到達すべきである。この際もし史的觀念の尊重が無かつたならば、前人の成したことが三であるといふ所以を知らず、之れを破壊して新に一から改めて始めるようなものであつて、甚だ手

數がかゝるばかりでなく、斷じて非理な事といはなければならない。孔子は千古の大聖人であつたが故に、史的觀念の尊重に於て、特に其の意を致し、新に儒教を大成したに係らず、三代の倫理説をも、其の虚に傳へ、後世の人をして歴史的研究の必要を認知せしめたので、大學の書に説くところは、實に之れに外ならぬのである。

大學に説くところの倫理説は、決して一人の頭腦から出たものでなく、長い年月の間自然に發出したものであつて、實は支那人祖先の倫理觀といふべきものである。上は伏羲、神農、黄帝、堯、舜より、下は殷周の世に至るまで、天下の貴賤に教ふるところ、たとひ法度、節目確然定まつた者は無かつたにしろ、なほ且つ一定したる義理は自ら存在して居たのに相違ない。それから、かゝる倫理上の法則もしくは約束を、當時の社會全體に弘布せしむる機關の裝置は、學校であつた。支那では案外早くから、學校といふものが設けられて居たので、舜の時分には、この制度頗る觀るべきものであつたらしい。この學校では、様々の技術を教へたけれど、その根本の精神は、人格の涵養に在るので、謂はゆる德育がその主要なるものであつた。そこで學校の教師は、希臘人が七聖人の遺言に於けると同じく、又今日の日本が教育の勅

語に於けると同じく、一に古先聖王の言を取りて、この深義を闡明して口授したので、師弟相傳へ、一定せる無文の倫理教科書は、どこの學校にでもちやんと備はつて居たので、大學の書の冒頭に說くところ、治國平天下といふのは、當時道德の極致であつた。

春秋の世になると、諸侯の國に於て、學校の政修まらず、教化陵夷した結果、風俗も大いに頽廢した。そこで孔子は三千の弟子に教へ始に舊來の道德說を說き、次きに己れの案出に係る新說を傳へたのである。しかし、大學は孔子の筆に成つたものではない。

孔子の弟子の中、六藝に通ずるもの、七十二人、この內でも後世に大影響を及ぼした二派となつて對立したのが、曾子と子夏とである。曾子は、道德の實踐を主とし、子夏は文獻の研究を重んじた。かくて、例の舊來の倫理說は、曾子の傳が第一に確實であつて、大學の書中、篇首一章は、其の手に成つたといふ說も出たのであるが、その文體が均一であるところを見ると、たとひ曾子の書きかけた處があるにしても、誰れか一人の手に因つて整理されたものであつて、その筆者は、疑ひもなく、曾子の弟

子で無ければならぬ。

曾子の弟子も隨分多かつたに違ひないが、その中で、有名なのは二人、樂正子春と子思とである。しかし、子春は、さほど學問道德のえらくあつた人でも無いらしいから、大學の書は、子思が作つたものでもあらう。子思は、前にも述べた如く、孔子の孫で、名を伋といひ、中庸を作り、又子思子といふ本をも作つた。その詳しいことは他日中庸の御話をする時に述べることに致さう。

大學が子思の作であることは、ひとり予の私見ではない。潘煥文の四書徵言、大學第一、大學之道の章の注に「これ子思聖經を述べて訓を垂るゝなり」とある。されば程子が單に「大學は孔氏の遺書」といつたのは、漫然舊說に從つたのであつて、さほどの誤でないにしろ、決して愼重なる學者の言葉とすることは出來ない。

大學の性質はかくの如きものであつて、儒家に取りては極めて重要なる古典であるのだが、秦火の後、禮記中に入れられたものだから、累代の學者、この眞價を認めるものがなかつた。しかし毛奇齡が「もと春狀諸經を以て大經となし、孟子論語と大學中庸を以て小經となす」といひ、韓愈が原道を作り佛老の書を痛論し、傳曰の二字

を下し、本書の大眼目といふべき古之欲明明徳於天下者の數句を引いたのを見れば、この書は丸で埋沒して居たといふのでも無いらしい。それから、宋の仁宗天聖八年、この書を以て、新第王拱辰に賜はつたことなどから考へれば、或る場合には單行して居たのである。しかし之れを禮記の中から取り出したのは、かつて述べし如く、二程子の功であつて、決して之れを否定することが出來ない。

それから、一寸面白いのは、我が日本で、高倉天皇の御宇、清原賴業といふ儒者が、天子に奏し、禮記に收むるところ、大學中庸の二篇は、聖道の極を論じ、悉く備はらざる無ければ、平生叙覽あるべき爲め、特に二書を拔出し、分本となして、捧呈せむ、聖意如何といひ、天子も大いに之れを感賞されたといふことである。この賴業は、二程子よりも少しく前に當たる人で、東西の名賢、見るところ、期せずして相合したのも、一奇となすべきであらう。

四書をして後世に普及せしめたのは、朱子が集註を作つた爲めであるが、朱子の大學に於ける、甚だ宜しくない處がある。朱子は、大學の書を二部に分かち、篇首の一章を以て經となし、その他を傳となし、前者は曾子の記するところで、後者は曾子

の門人が書いたものだといひ、處々缺けたところがあり、且つ順序が顚倒して居るらしいといつて、色々にまぜくりかへし、且つ、かうでもあらうかなどといつて、書き足して見た。しかし、是れは朱子が自說に合はせようとしたから覺えず障害に出遇ふようになつたので、古書は、あくまで其の趣を失つてはならないのみならず、その理窟の不十分なところは、時代の關係上、止むを得ないことである。今普通世に行はれる大學は、要するに、朱子の大學であつて、まことの大學ではない。

しからば、大學を讀むには、如何なる本に從つたら善からうといふに、今でも禮記の中に收めてあるのが元の儘で、一番正しいのである。それから、王陽明の書き入れをした古本大學といふものもある。元來大學は、修心の法を說いたものであるところから、陽明學派の聖典となつたのであつて、その解釋は、昔の儘でなく、一歩を踏み過ごして、なか〳〵複雜で、多少六かしいようであるが、陽明の此の書は、朱註の大學と異にして、全く舊來の面目を改めないから、隨分準據とすることが出來る。陽明學は、明の末に一時の勢力を逞しうしたが、今の清朝に成ると施政の方針上から、その學派を歡待せず、却つてその絶滅を希望した形跡もある位であるから、支

那に於ては、その後全く行はれなかつた。しかし、日本に於ける陽明學は、德川時代頗る盛んなもので、その學者の手に成つた大學の註釋も、隨分多い樣である。その中で、學者の參考になるのは、大鹽中齋即ち平八)の古本大學刮目と吉村秋陽の古本大學臆議などであらう。

(二)大學の內容

大學の價値は、子程子の言、「大學は孔氏の遺書にして、初學德に入るの門なり。」に於て古人學を爲すの次第を見るべきもの、獨り此の篇の存するに賴り、而して論孟之れに次ぐ、學者必ず、是れに由つて學べば、その差はざるに庶幾からむ」といへるを見ても、明らかであつて、たとひ學派の差別各人性格の異があるにしても、この書に於て、疑議を挾むものは古今東西一人も無い。

大學は一手に出でた書であつて、決して經傳の別を設くべきものでないけれども胃頭の二百五字は、その網領であつて、その意義を敷張し、且つ闡明したものである。さて謂はゆる網領たる重要の大文字は、如何なるものかといふと、次きに載する如きものである。

大學之道、在明明德、在親民、在止於至善、知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得、物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣、古之欲明明德於天下者、先治其國、欲治其國者、先齊其家、欲齊其家者、先修其身、欲修其身者、先正其心、欲正其心者、先誠其意、欲誠其意者、先致其知、致知在格物、物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身修、身修而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平、自天子至庶人、一是皆以修身爲本、其本亂而末治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也、初學者の爲めに謀り、之れを假名交り文に書き下ろせば……

大學の道は、明德を明らかにするに在り。民を親しうせしむるに在り。至善に止まるに在り。止まるを知つて後に定まるあり、定まつて後に能く靜かに、靜かにして後に能く安し、安くして後に能く慮る、慮つて後に能く得。物に本末あり事に終始あり、先後するところを知れば、道に近し。古人の明德を天下に明らかにせむと欲するものは、先づ其の國を治むと欲するものは、先づ其の家を齊へむと欲する者は、先づ其の身を修む。其の家を齊へむと欲するものは、先づ其の心を正しうせむと欲する者は、其の意を誠にせむと欲する者は、先づ其の知を致す。知を致すは物に格るに在り。